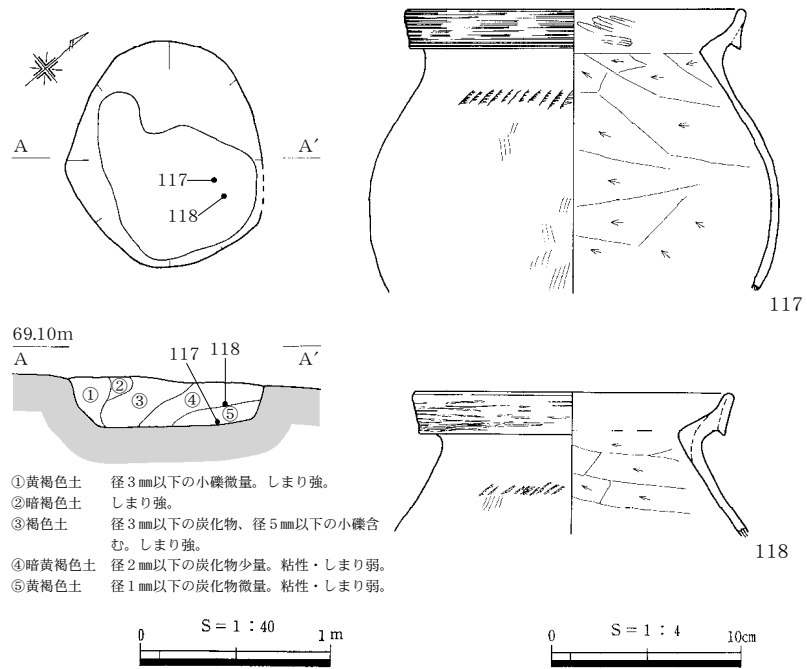


**S K 84 (第125・126図、表47、PL.20・36・38)**

L 8 グリッド、標高68.9mの丘陵平坦面に位置し、南東側1mにS I 6が隣接する。暗褐色土と黄褐色土が混在する埋土であり、人為的に埋め戻された可能性が高い。底面近くで出土した甕117・118は清水編年V-3様式に比定され、本遺構は弥生時代後期後葉のものと考えられる。(高尾)



**S K 85 (第127・128図、表47、PL.37)**

N 9 グリッド、標高69.4mの緩斜面部に位置する。平面形は長軸2.04m、短軸1.3mの楕円形を呈す。検出面からの深さは最大0.5mを測る。埋土中から出土した底部119と胴部片などから、本遺構の時期は弥生時代後期と考えられる。(高尾)

**S K 86 (第129・130図、表47、PL.38)**

M 8 グリッド、標高69.1mの丘陵平坦面に位置する。平面形は長軸1.65m、短軸1.07mの隅丸長方形を呈し、深さは0.25mを測る。甕120は検出面で出土しており流れ込みの可能性が高い。本遺構は弥生時代後期後葉以降に埋没したと考えられる。(高尾)

**S K 88 (第131図、PL.21)**

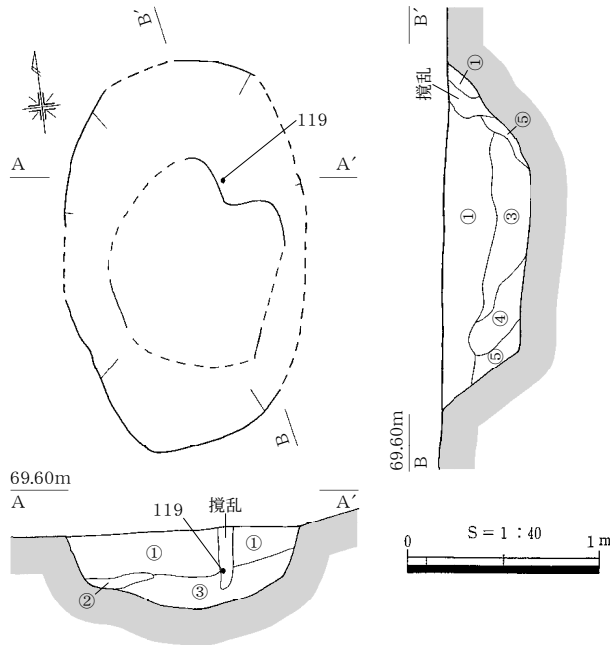
O 9 グリッド、標高69.6mの緩斜面に位置する。S D 1 に切られ、遺存状態は良くない。長軸1.3m、短軸0.85m、検出面からの深さ0.2mを測り、平面形態は隅丸長方形を呈する。埋土は暗褐色土を主体とし、少量の炭化物粒が混入する。遺物は出土しておらず、時期・性格とも不明である。(岩井)

**S K 89 (第132図)**

N 10 グリッド、標高約68.5mの東山緩斜面上に位置する。平面形は、長軸2.65m、短軸1.48mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは最大0.50mを測る。北東側が部分的な攪乱を受けている。埋土中からは、清水編年V-3様式に比定される小破片が出土していることから、弥生時代後期後葉に廃絶されたものと考えられる。(小口)

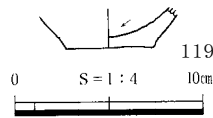
**S K 90 (第133図)**

M 9 グリッド、標高68.8mの緩斜面に位置する。長軸0.6m、短軸0.4m、検出面からの深さは最大0.25mを測り、平面形態は楕円形を呈する。埋土は黒褐色土を主体とし、焼土粒・炭化物粒が混入する。遺物は出土しておらず、時期・性格とも不明である。(岩井)

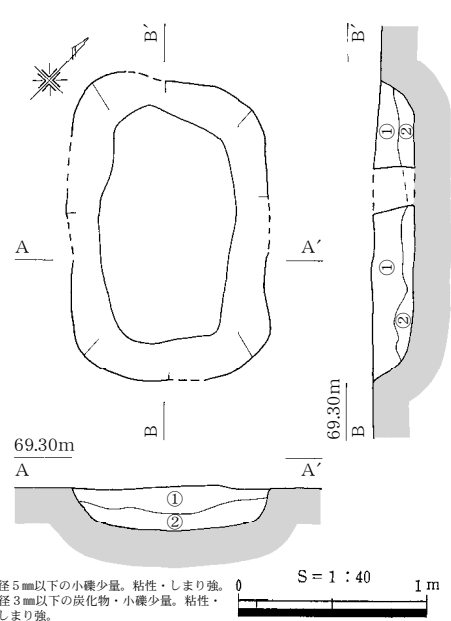


- ①暗黄褐色土 径3mm以下の炭化物微量、径5mm以下の小礫多量。粘性・しまりやや強。
- ②黄褐色土 しまり弱。
- ③暗黄褐色土 径5mm以下の炭化物・小礫微量。しまり弱。
- ④黄褐色土 径2mm以下の小礫微量。粘性強・しまり弱。
- ⑤黄褐色土 径5mm以下の小礫、黄白色ローム粒微量。

第127図 SK 85

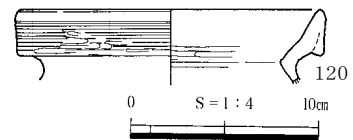


第128図 SK 85出土遺物

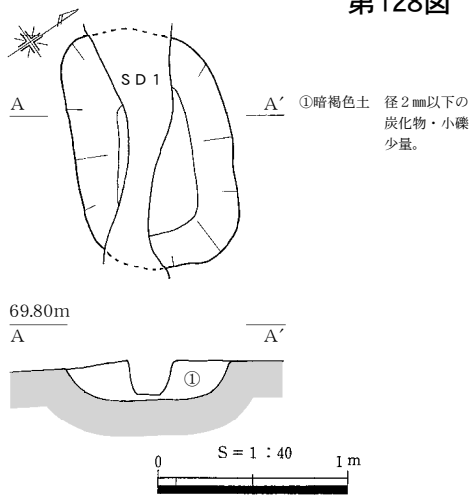


- ①暗黄褐色土 径5mm以下の小礫少量。粘性・しまり強。
- ②淡褐色土 径3mm以下の炭化物・小礫少量。粘性・しまり強。

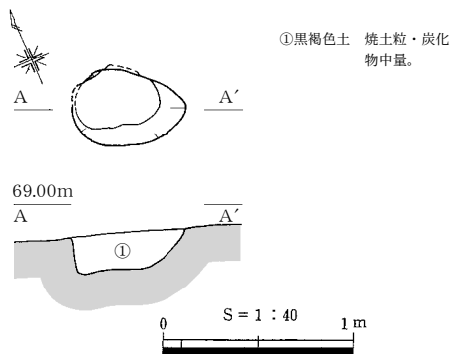
第129図 SK 86



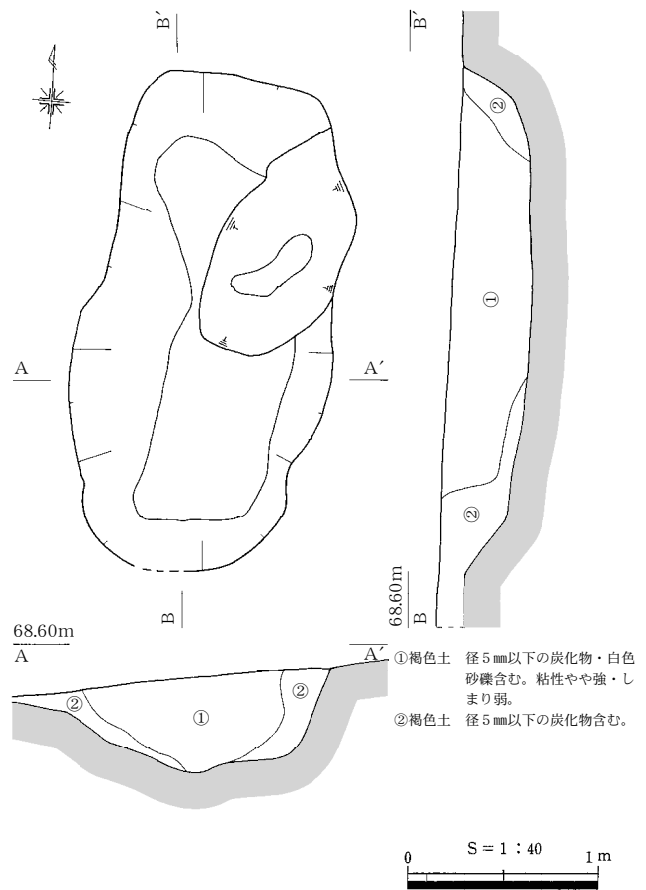
第130図 SK 86出土遺物



第131図 SK 88



第133図 SK 90



第132図 SK 89

表47 SK84~86出土土器観察表

遺物No.	遺構位	器種	口径(cm) 器高(cm)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
117	SK84 埋土	弥生土器 甕	※17.6 △15.0	1/4	外面：口縁部多条平行沈線後ナデ消し、肩部貝殻腹縁による刺突文、胴部ハケ後ナデ 内面：口縁部ナデ後ミガキ、頸部以下ケズリ	密 1mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	煤付着
118	SK84 埋土	弥生土器 甕	※16.6 △8.5	1/4	外面：口縁部9条の多条平行沈線、頸部ココナデ、肩部板状工具による連続刺突文・ハケ 内面：口縁部丁寧なココナデ、頸部以下ヘラケズリ	密 2mm以下の白色砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	
119	SK85 埋土	弥生土器 底部	底径※4.8 △2.1	底部1/3	外面：ナデ 内面：ナデ	密 1mmの白色砂粒	外面：にぶい黄褐色～褐灰色 内面：浅黄色	良好	
120	SK86 埋土	弥生土器 甕	※16.0 △3.9	口縁部1/4 以下	外面：口縁部9～10条の多条平行沈線後ナデ消し、頸部ココナデ 内面：口縁部ココナデ	密 2～3mmの白色砂粒	外面：にぶい黄橙～橙色 内面：橙色	良好	

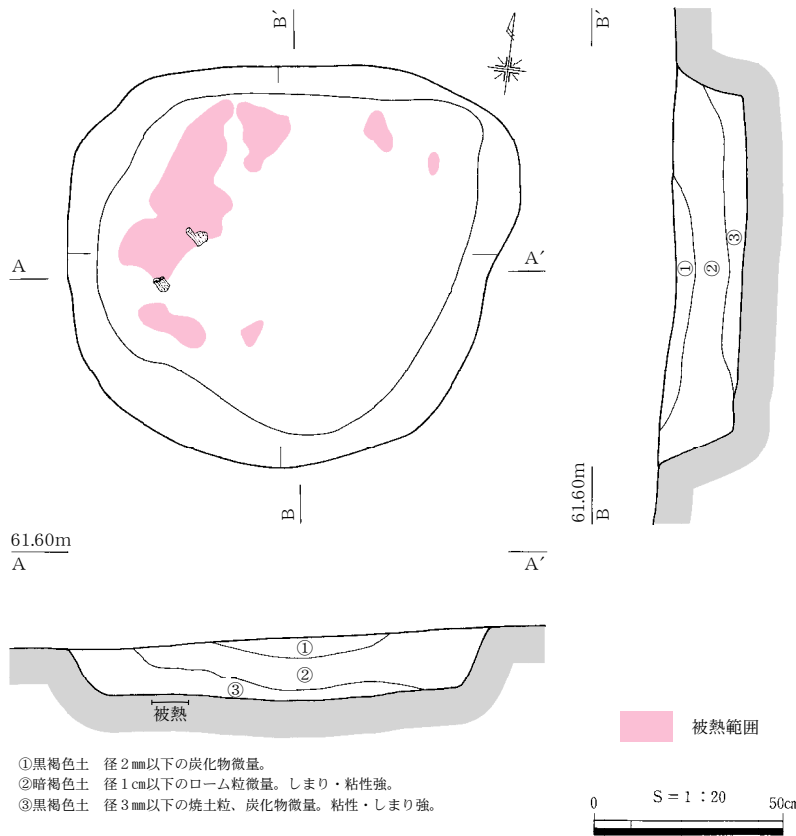
製炭土坑

本遺跡で検出された土坑のうち、埋土に多量の炭化物および焼土粒が混入する、壁面及び底面に被熱痕跡が認められるといった特徴をもつものが14基ある。平面円形あるいは隅丸方形を呈すこれらの土坑は、底面よりも壁面を中心に被熱痕跡を顕著に残すという点でも概ね共通する。同様な土坑は本遺跡も所在する琴浦町（旧赤碕町）の別所中峯遺跡で調査されており、上記の諸特徴は簡易な「伏せ焼き」法を用いて炭を焼いた土坑に認められることから、製炭土坑として評価・報告されている（大野2004）。先述した本遺跡の土坑は別所中峯遺跡例に比して若干小さいが同じ平面形態であり、上記特徴も有しているため、製炭土坑であると考えられる。ただ、埋土中の混入物や壁・底面の被熱痕跡は遺構ごとで差異があり一様に製炭土坑と断定できないが、ここではその可能性が推定されるものも含めて報告する。

（高尾）

【参考文献】

大野哲二ほか 2004『松谷中峰遺跡・別所中峯遺跡』（財）鳥取県教育文化財団



第134図 SK 1

SK 1（第134図、PL.22）

位置 C16グリッド、標高61.4mの平坦面に位置する。

調査の経過 V層上面にて黒褐色土の不整形プランを検出したため、土層観察用のベルトを設定し、調査を行った。

規模・形態 長軸1.15m、短軸1.1mの不整形で検出面からの深さは25cmを測る。被熱面は壁面において認められず、底面北東～南西部にかけ「コ」の字状にみられ、特に北西部が強く熱を受けている。

埋土と遺物の出土状況 ①・③層は黒褐色土が主体をなし、②層は検出面に相当するソフトローム層に近似する。最下層には微量ながら焼土粒、炭化物が含まれる。遺物は出土していない。

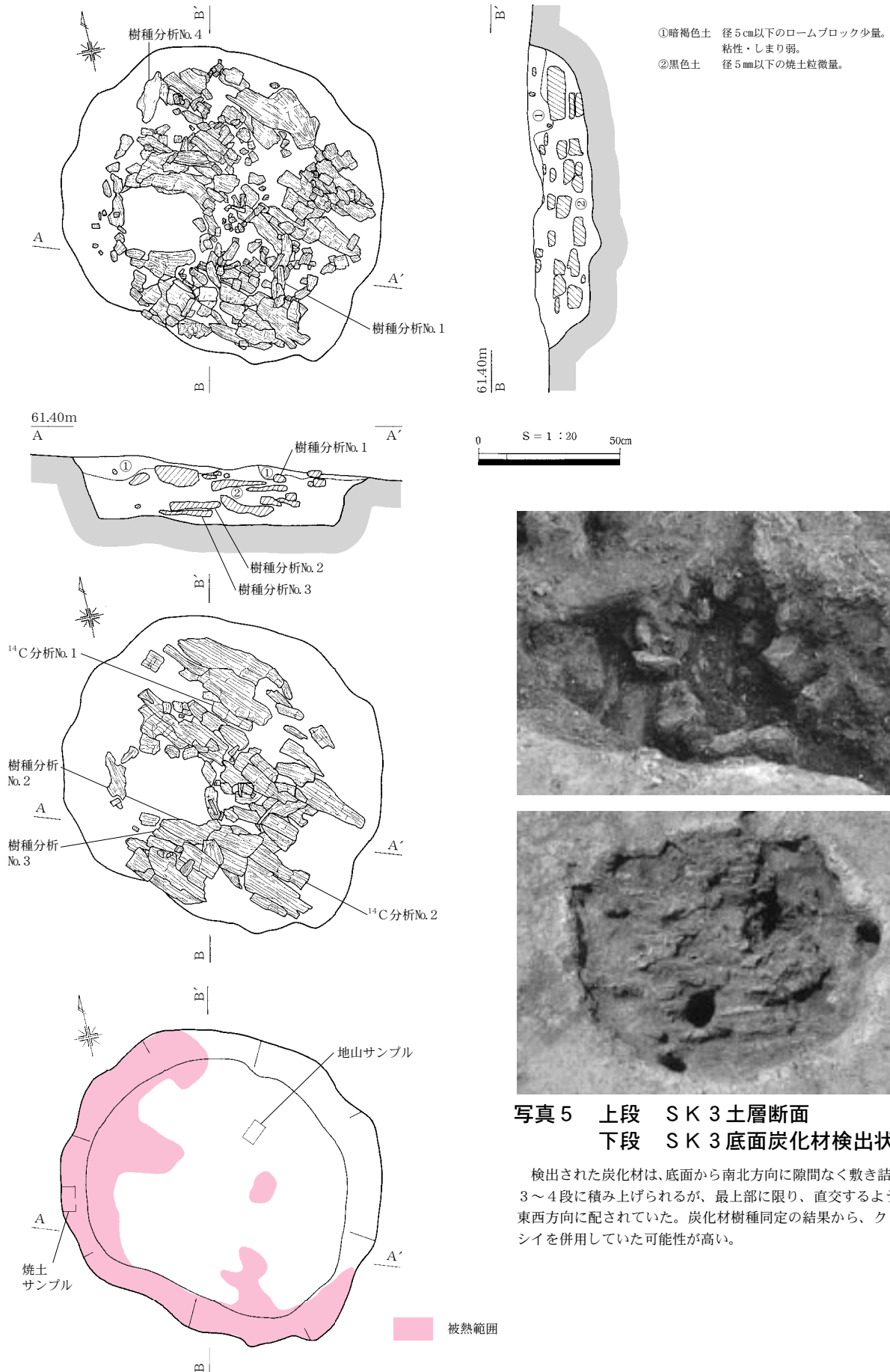


写真5 上段 SK 3土層断面  
下段 SK 3底面炭化材検出状況

検出された炭化材は、底面から南北方向に隙間なく敷き詰め、3～4段に積み上げられるが、最上部に限り、直交するように東西方向に配されていた。炭化材樹種同定の結果から、クリ・シイを併用していた可能性が高い。

第135図 SK 3

**時期** 時期は出土遺物がないため不明である。用途は底面に被熱面が認められることから、焼成土坑と考えられる。また、周辺においても類似する土坑（SK 3・10・27）が確認されているため、それらとの関連性も想定される。（福井）

**SK 3（第135図、写真5、巻頭PL.4、PL.6・7・22）**

**位置** C15グリッド、標高61.1mの平坦面に位置する。

**調査の経過** V層上面精査中に検出した。検出面にて多量の炭化材を検出したため、製炭土坑を想定し、面毎に炭化材の検出状況を記録し、掘り下げ、土層断面を記録する方法を用い調査を行った。

遺物は多量の炭化材を検出しているが、時期決定根拠になる遺物は出土していない。周辺においても遺構形態が類似する土坑（SK 1・27・31）が確認されたため何らかの関連性が想定される。

**規模と形態** 長軸1.14m、短軸1.04mの楕円形で検出面からの深さは24cmを測る。

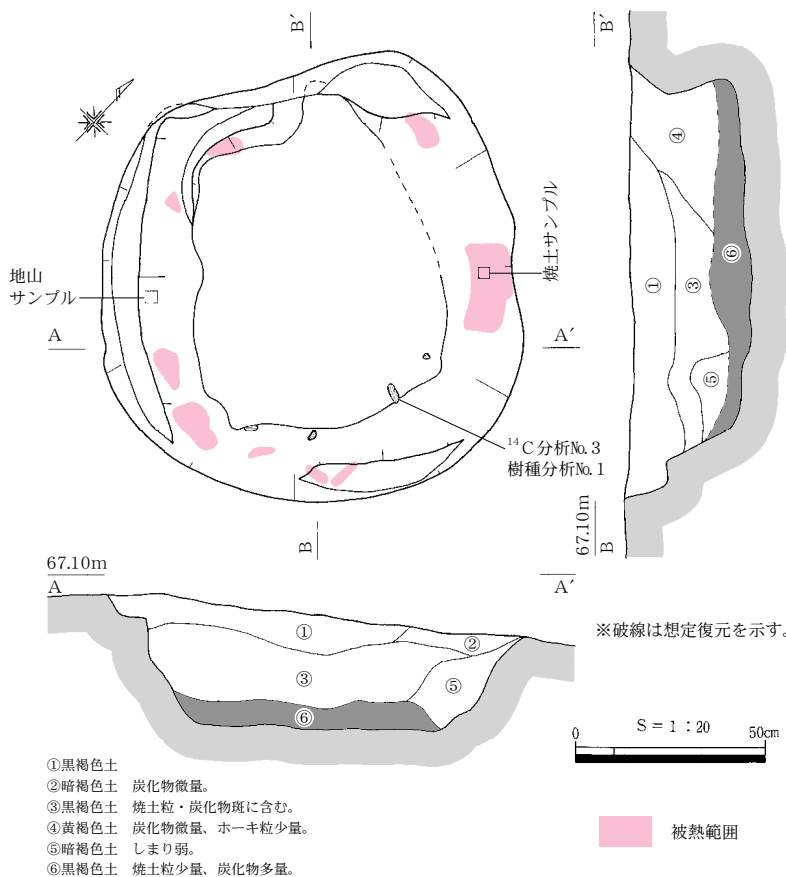
**埋土と遺物の出土状況** 埋土は2層に分層され、黒色土が主体をなす。最上面の炭化材は残存状況が良好ではないが、下位の炭化材に比べ、長さ・幅とも短く、下位の炭化材が長軸を東西方向に揃えて配しているのに対し、それらとは直交するように南北方向に配する。下位の炭化材は長さ50～60cm、幅5～10cmのものが多く、全面に3～4段積み重ねられていた。

被熱面は北～南東の底面および壁面にかけて「U」字状に認められ、硬化状況・色調より、壁面が底面より強く熱を受けたと考えられる。

**時期・用途** 本遺構の炭化材、壁面土壌サンプルを用いて、放射性炭素年代測定・炭化材樹種同定・剥片観察およびX線回折分析による被熱温度測定を行った（第5章第2～4節）。

時期は放射性年代測定では6世紀代の測定結果が得られている。次に、材質であるが、クリ・シイという分析結果が得られた。これらは最上部、下部のいずれにも併存することから、木材を積み上げる際に材質を選別し、積み上げた可能性は低いといえる。

用途の指標となる被熱温度測定では250℃以下の低い温度が推定された。この結果から十分な製炭焼成温度が得られたか疑問が残る。ただし、焼成された木材が原位置を保ち、極めて良好な状況で検出された本遺構は希少で今後の製炭土坑、焼成遺構を検討する上で貴重な事例といえるだろう。また、今後は実験研究なども取り入れて検討する必要があると思われる。（福井）



第136図 SK 6

## S K 6 (第136図、PL.22)

**位置** L15グリッド、標高67.1mの丘陵平坦面から北側にする緩やかな斜面地に位置する。

**調査の経過** 第V層精査中に径1mほどの範囲で炭化物を多く含む円形プランを検出した。

**規模と形態** 長軸1.2m、短軸1.08m、検出面からの深さは最大で0.42mを測り、平面形態は隅丸方形を呈する。底面の形状は平坦で、壁面では被熱面が部分的にみられた。被熱面の表面は、完全に硬化しておらず屑状に剥がれ落ちる状況であり、色調（赤橙～にぶい暗赤橙色）の差異も認められた。

**埋土** 埋土は6層に分層できた。黒褐色土～褐色土を主体とし、全体的に炭化物粒や焼土粒が混入している。特に底面直上の⑥層では、多量の炭化物を主体とする層が堆積しており、少量の炭化材小片や焼土粒も混入していた。

壁の被熱面では、被熱温度分析結果から250度以下の熱を受けていたことが分かった。また、⑥層中で出土した炭化材で樹種同定を行い、シイ属に属することも分かった。

**時期** 遺物は出土しておらず時期比定は困難であるが、⑥層で出土した炭化材片に放射性炭素年代測定を実施し、4世紀中頃の値が得られている。(岩井)

## S K 8 (第137図、PL.23)

**位置** M14グリッド、西山地区谷部に面する緩斜面上、標高約67.5mに位置する。

**調査の経過** 第V層精査中に約1.1×0.9mの範囲にわたって、炭化物を微量に含むプランを検出した。

**規模と形態** 平面形態は長軸1.15m、短軸0.95mの楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは最大0.17mを測る。底面は掘り鉢状を呈し、東側は谷部に面するため、壁が低い。

**埋土と遺物の出土状況** ソフトロームに近い①層黄褐色土が、②層暗褐色土を覆っている。①層はしまりが強く、人為的な埋め戻しの可能性が高い。②層は、炭化物と焼土粒子を密に含み、炭化材も散見される。西壁および底面の南北に島状の硬化した被熱面が確認された。

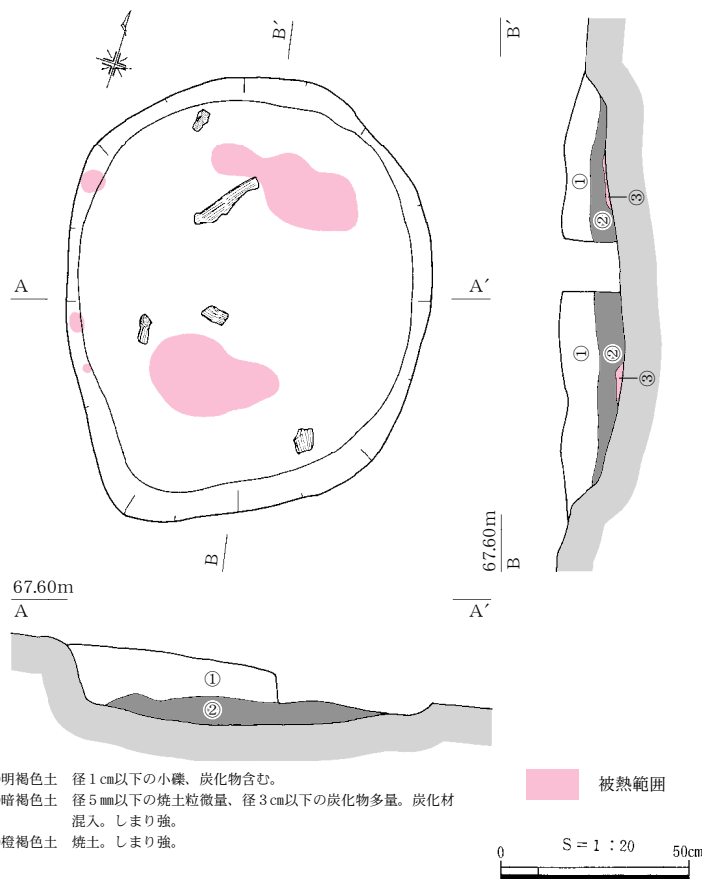
(小口)

## S K 22 (第138図、PL.23)

**位置** N14グリッド、標高67.7mの丘陵平坦面より北東側にする緩やかな斜面地に位置する。

**調査の経過** 第V層精査中に径1mほどの範囲で炭化物を多く含む円形プランを検出した。

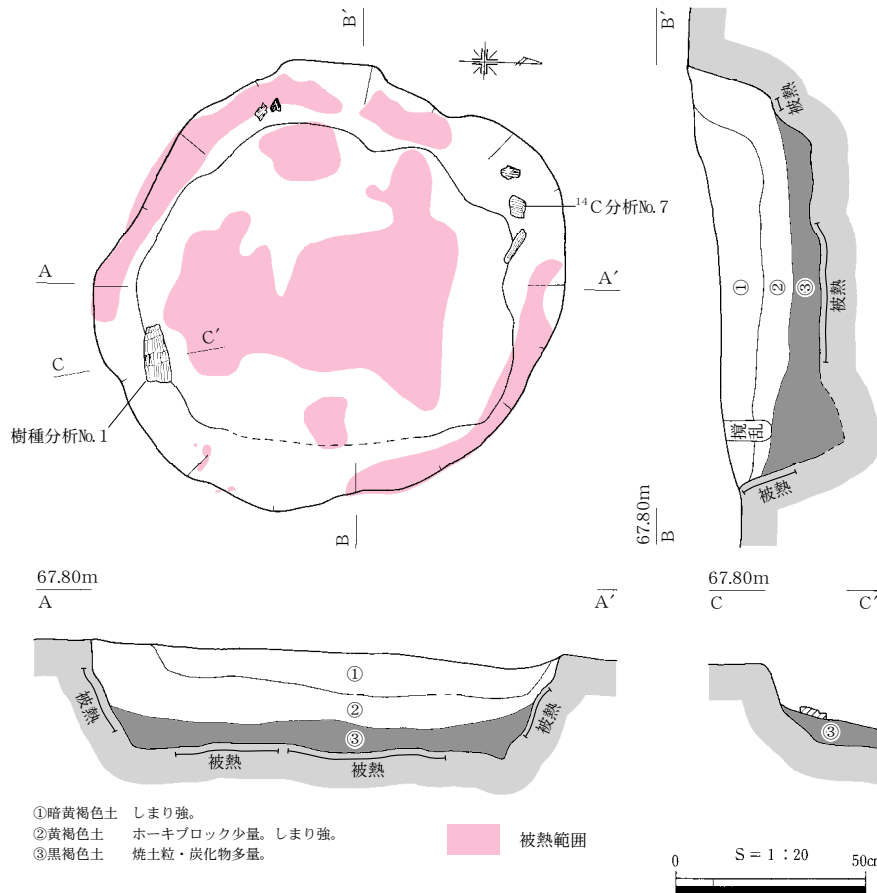
**規模と形態** 径1.2m前後、検出面からの深さは最大0.34mを測り、平面形態は不整円形を呈する。



第137図 S K 8



底面の形状は平坦である。底面および壁面では赤橙色の被熱面が認められた。壁表面はS K 6と同様に表面が屑状に剥がれ落ちる状況であったが、底面は硬化していた。



第138図 S K 22

**埋土** 埋土は3層に分層できた。床面直上の③層で多量の炭化物を主体とする層が堆積しており、大小の炭化材片や焼土粒も出土している。①・②層は炭化物が埋土中に混入しておらず、自然堆積によると考えられる。

③層で出土した炭化材では、樹種同定を行っており、シイ属に属することが分かった。

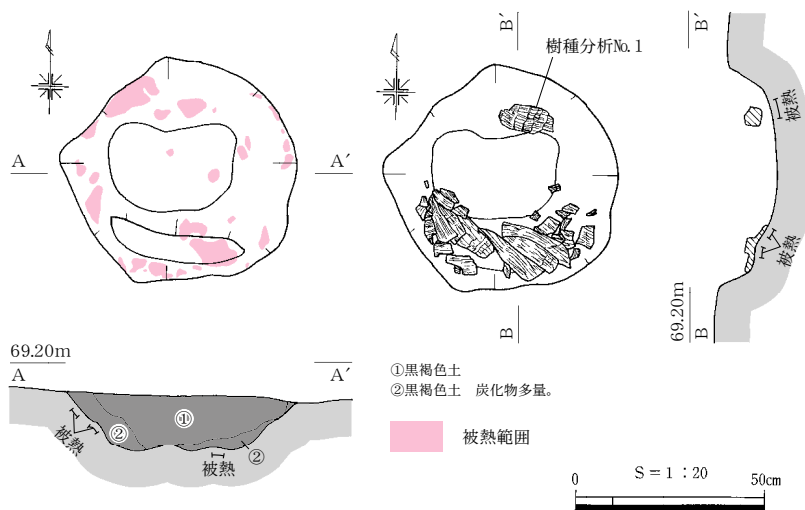
**時期** 遺物は出土しておらず時期比定は困難であるが、3層中から出土した炭化材片に放射性炭素年代測定を実施し、3世紀末葉の値が得られている。(岩井)

S K 31 (第139図、写真6、PL.23)

**位置** M 3 グリッド、標高69.12mの丘陵平坦面に位置する。

**調査の経過** 第V層精査中に径0.7mほどの範囲で炭化物を多く含む円形プランを検出した。

**規模と形態** 径0.6m前後、検出面からの深さは最大0.16mを測り、平面形態は円形を呈する。底面の形状はやや丸みを帯びる。底面および壁面では赤橙色の被熱面が部分的に見られた。被熱面はい



第139図 S K 31



写真6 S K 31炭化材検出状況

底面～南側壁面にかけて検出した炭化材と、中央で浮いた状態の焼土塊小片。炭化材の遺存状態は良い。(北東から)

ずれもやや硬化気味であった。

**埋土と遺物の出土状況** 埋土は2層に分層でき、上層は礫などを含まない炭化材が土壌化した土と考えられ、下層では遺存状態が良好な炭化材が出土した。炭化材は、北側と南側の底面から壁面にかけて認められた。

炭化材の出土状況(写真6)を観察すると、材が重なり合い壁面に固着したような状況で、木の繊維方向から東西軸に置かれたものと、北西-南東軸に置かれたものとに区別できた。前者が上位、後者が下位となっており、材が交互に組まれた状態で炭化したものと推測される。これらの材が燃焼材であるのか、使用に耐えない製品の遺存であったのかは不明であるが、製炭の状況を具体的にうかがえることのできる資料として興味深い。北側で出土した炭化材では樹種同定を行っており、ブナ科に属することが分かった。

**時期** 遺物は出土しておらず、時期は不明である。(岩井)

**S K 32 (第140図、PL.24)**

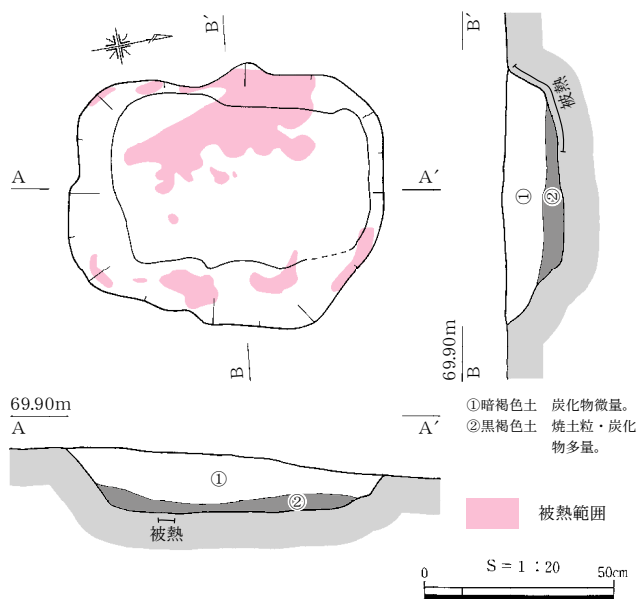
**位置** M4グリッド、標高69.8mの丘陵平坦面に位置する。南東側ではS K 33が近接している。

**調査の経過** 第VI層精査中に0.8×0.7mほどの範囲で炭化物を多く含む不整形プランを検出した。

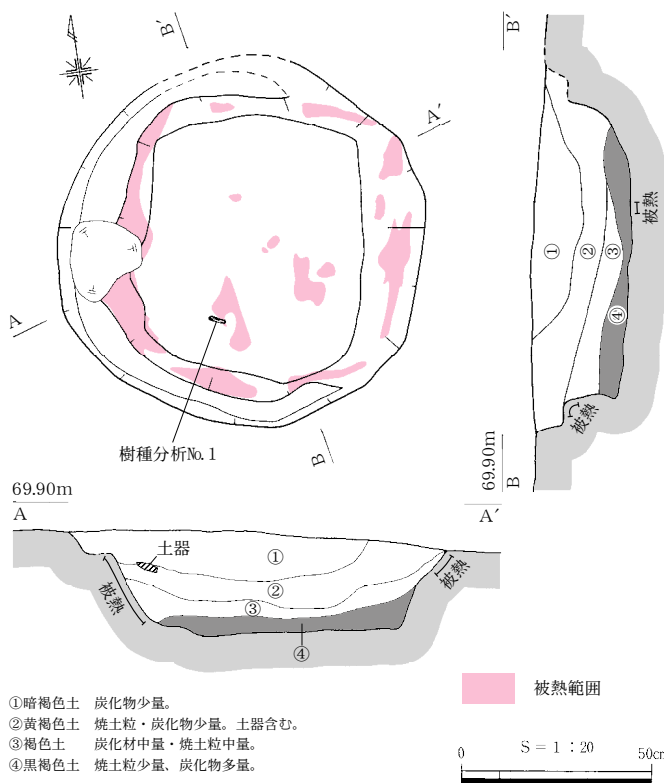
**規模と形態** 長軸0.8m、短軸0.67m、検出面からの深さは最大0.17mを測り、平面形態は隅丸長方形を呈する。底面の形状は平坦である。底面および壁面では、にぶい暗赤橙色の被熱面が部分的にみられた。被熱面の表面は完全に硬化しておらず、屑状に剥がれ落ちる状況であった。

**埋土と遺物の出土状況** 底面直上の②層は、多量の炭化物を主体とする層で、炭化材小片や焼土粒も混入している。上層でも炭化物がわずかに含まれるが、自然堆積と判断される。

**時期** 遺物は、土師器片2点が①層中から出土した。上層での出土であり、いずれも小片で図化に耐えるものではなかった。その他の遺物も認められなかったため、時期は不明である。(岩井)



第140図 S K 32



第141図 S K 33



S K 33 (第141図、PL.24)

**位置** M 4 グリッド、標高69.8mの丘陵平坦面に位置する。北西側ではS K 32が近接している。

**調査の経過** 第VI層精査中に径1 mほどの範囲で炭化物を多く含むプランを検出した。

**規模と形態** 一辺0.95m、検出面からの深さは最大0.24mを測り、平面形態は隅丸正方形を呈する。底面の形状は平坦である。被熱面はにぶい赤橙色で、壁面を中心に広がり、底面でも部分的に見られた。被熱面の表面は、屑状に剥がれ落ちる状況であった。

**埋土と遺物の出土状況** 埋土は全体的に炭化物粒や焼土粒が混入している。底面直上の④層は、多量の炭化物を主体とする層で、その上層③層では炭化物の混入とともに焼土粒も多く認められた。

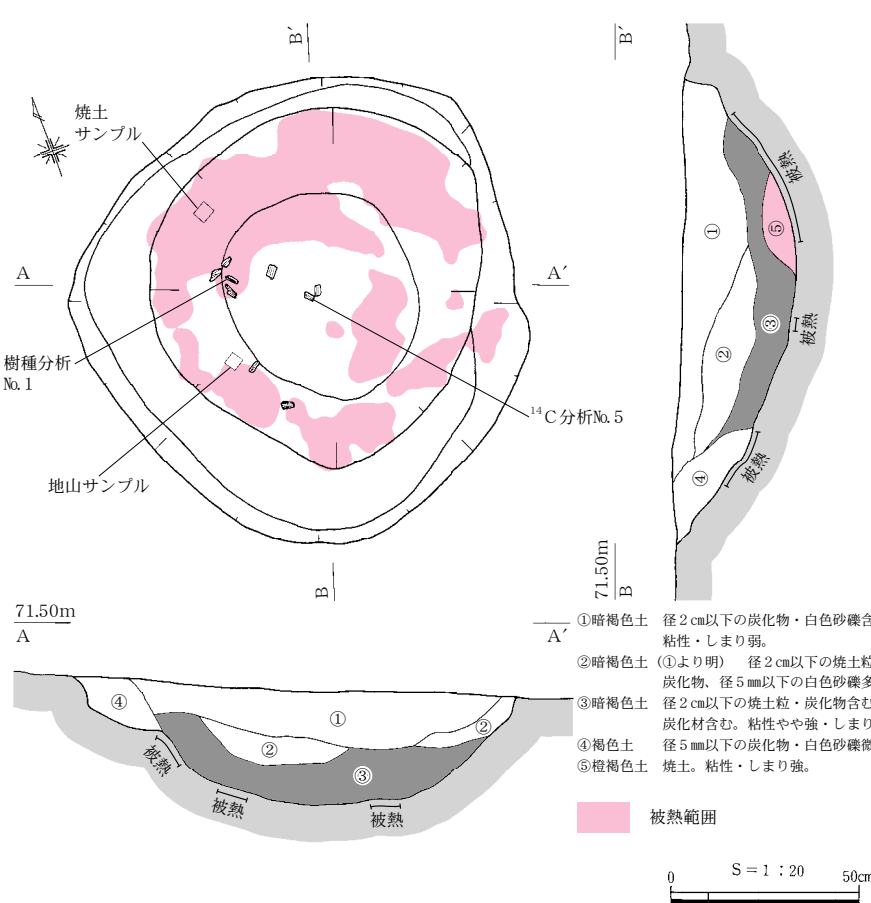
南西側で出土した炭化材は小片であるが、樹種同定を行っており、シイ属に属することが分かった。

**時期** 遺物は、土師器片1点が②層中から出土した。上層での出土であり、小片で凶化に耐えうるものではなかった。その他の遺物も認められなかったため、時期は不明である。(岩井)

S K 40 (第142図、PL.25)

**位置** V 8 グリッド、標高約71.4mの台地平坦面に位置する。

**調査の経過** 表土下、第II層遺構検出作業中に約1.2×1.2mの範囲に炭化物と焼土粒子を多く含むプランを検出した。掘り下げの結果、炭化物を多く含む層と底面に硬化した被熱部が確認されたため、製炭土坑と判断した。なお、③層暗褐色土内の炭化材については放射性炭素年代測定(試料No.4)、樹種同定分析(サンプルNo.1)のため、底面の被熱部については焼成温度測定用にサンプルを採取した(第5章第2～4節参照)。



第142図 S K 40

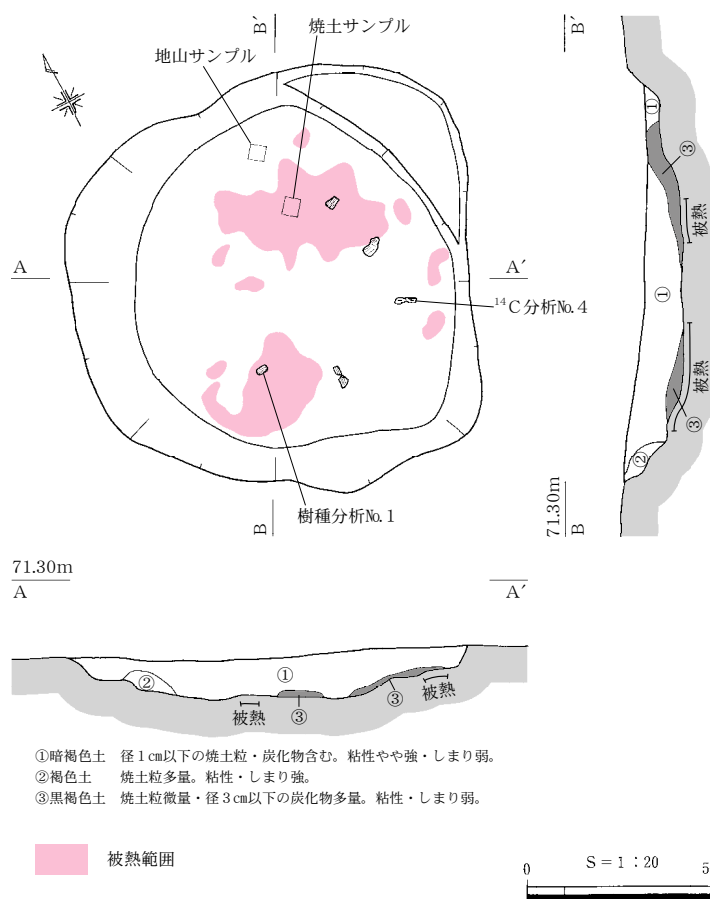
**規模と形態** 平面形態は南北1.22m、東西1.15mの不整形円形を呈している。検出面から底面までの深さは最大30cmを測り、掘り鉢状に掘り込まれていた。また、東壁部を除いた壁は幅7~20cm、検出面からの深さ約11cmの段状となっている。

**埋土と遺物の出土状況**

①層暗褐色土下に炭化物・炭化材を多く含む②・③層暗褐色土が堆積している。③層西壁寄りには長さ3~5 cmほどの炭化材が散在し、また焼土ブロックもみられることから、残存した炭化材が土壌化したもの

と想定される。これらの炭化材はいずれも小片であるが、樹種同定を実施した結果、ブナ科であることが分かった。⑤層橙褐色土は焼土粒子を密に含んでおり、北壁寄りに堆積する。この⑤層下部および底面中心部を取り囲むように硬化した被熱面がめぐっていた。④層褐色土は、炭化物や白色砂粒を含むソフトロームに近い土壌であり、伏せ焼きの際の天井部の土が残存した可能性もある。

**時期** ③層直上から出土した炭化材について放射性炭素年代測定を行ったところ、4世紀中頃の測定結果を得ている。(小口)



**S K 43 (第143図、PL.25)**

**位置** U 8 グリッド、標高約71.1mの台地平坦面に位置する。

**調査の経過** 表土除去後、遺構検出作業中に約1.1×1.1mの範囲に炭化物と焼土粒子を多く含むプランが検出された。掘り下げの結果、炭化物を多く含む層と底面に硬化した被熱部が確認されたため、製炭土坑と判断した。なお、③層内の炭化材について放射性炭素年代測定(試料No.4)、樹種同定分析(サンプルNo.1)を実施している(第5章第2～4節参照)。

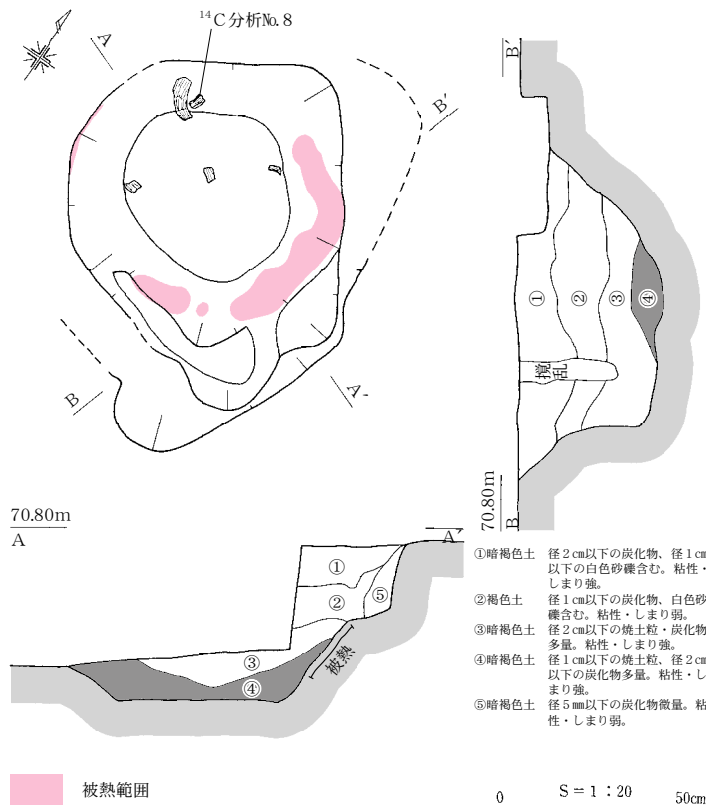
**規模と形態** 平面形態は、南北1.07m、東西1.08mの隅丸方形を呈している。検出面から底面までの深さは最大12cmを測り、掘り鉢状を呈していた。北東部コーナーは幅7cm、検出面からの深さ4cmのテラス状となっている。

**埋土と遺物の出土状況** 埋土は炭化物・焼土粒子を含む①層暗褐色土がほぼ全面を覆っており、焼土粒子を多く含む②層褐色土が西壁寄りに部分的に堆積していた。炭化材や焼土粒子を多く含む③層黒褐色土は、西壁を除いた壁面上に底面被熱部と重なるように認められる。③層内には、長さ3～5cmほどの炭化材が散在していることから、燃焼材として残存した炭化材が、土壌化したものと考えられる。これらの炭化材はいずれも小片であるが、樹種同定を行った結果、シイ属であることが分かった。

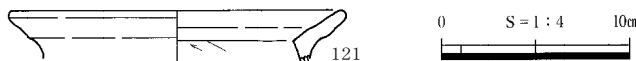
**時期** ③層中から出土した炭化材について放射性炭素年代測定を行ったところ、3世紀初頭の測定結果が得られているが、①層埋土の土質は、基本層序Ⅱ層に近く、最終的な埋没時期もこれに近いものと推察される。(小口)

**S K 58 (第144・145図、表48、PL.25・37)**

**位置** T 8 グリッド、標高70.7mの緩斜面に位置する。本遺構はS I 2埋土を掘り込んで築かれており、北東壁の一部を除いて同居と重複している。



第144図 SK 58



第145図 SK 58出土遺物

**調査の経過** 埋土上層がS I 2埋土と近似していたことから当初平面的な検出ができず、炭化物を顕著に含む④層と同層の周縁部に形成された被熱面を検出した時点で本遺構の存在を認識し、製炭土坑の可能性が高いと想定して調査にあたった。

**規模と形態** 土坑西側の大半は住居埋土と誤認して掘り下げたため滅失しており、本来の規模・形状は不明である。残存規模は長軸1.03m、短軸0.9m、深さ0.5mを測り、残存部分から推測される本来の平面形は不整楕円形となるうか。

**埋土と遺物の出土状況** ④層には焼土粒・炭化物が多量に含まれている。炭化物は径1cmに満たない小片ばかりで製炭後の残片と考えられ、底面および北西側に広がっていた。被熱面は壁面下部に形成されており、土坑東側に顕著で「コ」字状に広がるが赤色硬化の程度は弱い。底面に被熱面は認められない。埋没過程

で混入したとみられる土師器の小片が①層から出土しており、甕121を図化した。

**時期** ④層から出土した炭化物について放射性炭素年代測定を行ったところ、4世紀末から6世紀中頃という測定結果を得た。ただ、出土した土師器甕121の形態的特徴からすれば、①層の堆積時期、すなわち土坑の最終的な埋没時期は7世紀以降であろう。(高尾)

S K 63 (第146図、PL.24)

**位置** R 6 グリッド、標高71.0mの丘陵平坦面に位置する。

**調査の経過** 第VI層精査中に径1mほどの範囲でプランを検出した。当初、製炭土坑と認識はしていなかったが、サブトレンチを設定し掘り下げを行った結果、底面付近で炭化物を多く含む層を検出した。他に焼土粒の混入、被熱面も認められたことから製炭土坑と認定し調査を実施した。

**規模と形態** 一辺1.0m前後、検出面からの深さは最大0.35mを測り、平面形態は隅丸正方形を呈する。底面の形状はやや凹凸がみられ、にぶい暗赤橙色の被熱面が、壁面で認められた。被熱面の表面は、完全に硬化しておらず屑状に剥がれ落ちる状況であった。

**埋土と遺物の出土状況** 底面直上の③層では、特に多量の炭化物を主体とする層が堆積している。

表48 SK 58出土土器観察表

遺物No.	遺層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
121	SK 58埋土	土師器甕	※17.5 △2.7	口縁部1/8	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ	密 1mm以下の白色砂粒	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄褐色	良好	口縁部外面備付着

②層でも炭化物粒や焼土粒が認められるが、自然堆積によると思われる。

壁の被熱面から土壤サンプルを採取し、被熱温度分析から250度以下の熱を受けたことが分かった。

**時期** 遺物は①層から出土しているが、図化に耐えうるものではなかった。③層で出土した炭化材片に放射性炭素年代測定を実施し、3世紀後葉の値が得られている。(岩井)

**S K 67 (第147図、PL.26)**

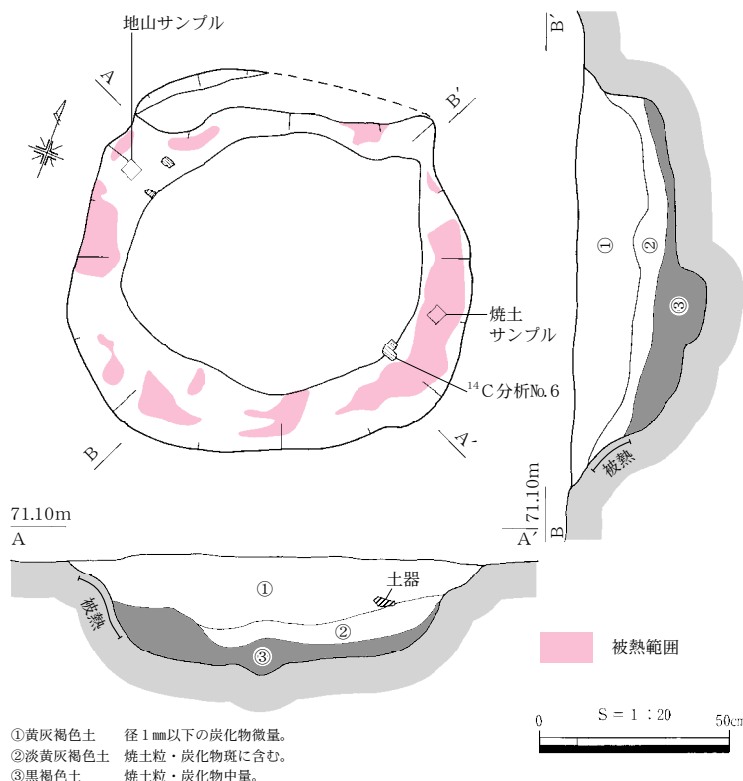
**位置** S 6 グリッド、標高70.9mの丘陵平坦面に位置する。

**調査の経過** 第VI層精査中に径0.8mほどの範囲で炭化物を多く含むプランを検出した。

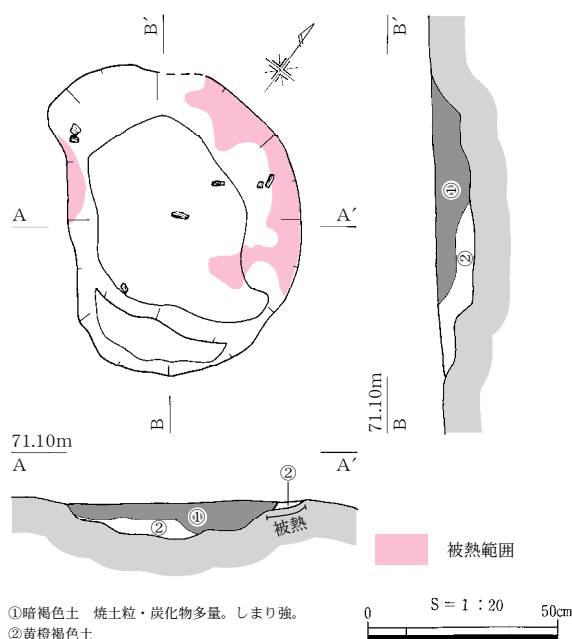
**規模と形態** 長軸0.8m、短軸0.62

m、検出面からの深さは最大0.11mを測り、平面形態は不整楕円形を呈する。規模は他の製炭土坑と比べると、S K 31と同様やや小型である。底面の形状はやや起伏がみられるがほぼ平坦である。被熱面は明赤橙色で、壁面にのみ見られやや硬化していた。

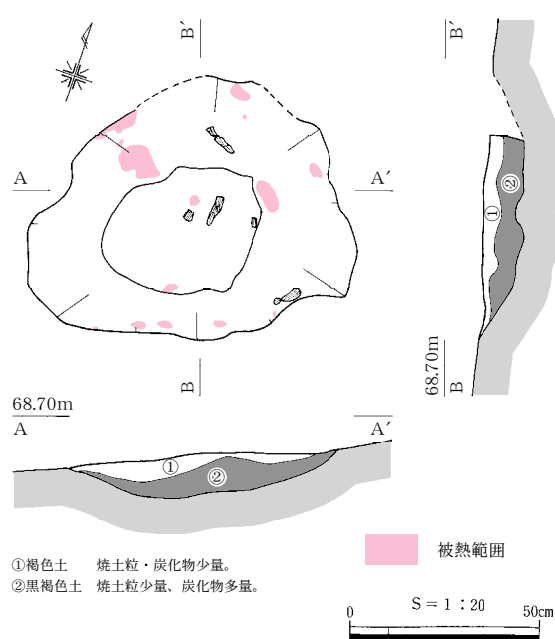
**埋土と遺物の出土状況** 他の製炭土坑と異なり、炭化物を主体とする層の下に、炭を含まない②層が堆積している。地山土をブロック状に含んだ土であるため、自然堆積によるものと考えられる。①



第146図 S K 63



第147図 S K 67



第148図 S K 87

層は褐色土を主体とし、炭化物粒や焼土粒、炭化材小片を含む層である。

**時期** 遺物は出土しておらず時期は不明である。 (岩井)

#### S K 87 (第148図、PL.26)

**位置** M 9 グリッド、標高68.5mの丘陵平坦面から北西側を下る緩やかな斜面に位置する。

**調査の経過** 第VI層精査中に径0.7mほどの範囲でプランを検出した。当初、製炭土坑と認識はしていなかったが、サブトレンチを設定し掘り下げを行った結果、底面付近で炭化物を含む層を検出した。他に焼土粒の混入、被熱面も認められたことから製炭土坑と認定し調査を実施した。

**規模と形態** 長軸0.85m、短軸0.68m、検出面からの深さは最大0.11mを測り、平面形態は不整楕円形を呈する。底面はやや起伏があるがほぼ平坦である。被熱面はにぶい赤橙色で、壁面と底面でまばらに認められた。

**埋土と遺物の出土状況** 埋土は2層に分層でき、褐色土を主体とする。炭化物粒や焼土粒が混入し、下層のほうがやや多く含まれる。②層中および底面にかけて炭化材小片が認められた。

**時期** 遺物は出土しておらず、時期は不明である。 (岩井)



写真7 調査後遠景(北東から)  
※写真左側は笠見第3遺跡

第4節 製鉄・鍛冶関連遺構

**遺構の概要 (第149図、PL.11)** 製鉄・鍛冶関連遺構は調査区南寄り、谷を挟んだ東山・西山の緩斜面上に構築されている。これらは9世紀代に形成したと考えられる第Ⅱ層が堆積する範囲に重なる。西山では大型礫の下部から鉄滓類がまとまって出土したSS3が位置する。標高約67mである。金属学的分析により2点が製錬系の含鉄鉄滓であることが明らかとなった。一方、東山ではSB6・7の2棟の鍛冶遺構が標高約69~70mに立地している。中心部に鍛冶炉を有する掘立柱建物跡であり、遺構内からは多量の鍛冶関連遺物が出土した。これらの遺構の間に谷が介在しているが、谷部包含層や土坑・ピットからも鉄滓や鉄床石といった遺物が多くみられ、排滓場に近い役割を果たしていたものと考えられる。また直接、製鉄・鍛冶関連遺構とを結びつけることはできないが、SK78およびR10、R12グリッドからは被熱粘土塊の集中ブロックが確認された。

**調査の経過と方法** 西山における遺構検出作業の最終段階、調査区南端に段状遺構が検出された。掘り下げを実施したところ、径30cmほどの大型礫の周囲に小型の鉄滓が出土しはじめ、精査を行ったところ礫下部に鉄滓ブロックが確認された(PL.17)。鉄滓類は原位置を記録するように努め、周辺土壌のサンプリングを実施した。

東山では、S9グリッドで径80cmほどの炭化物と焼土が集中する範囲が確認され、同時にS10グリッドでも径60cmの焼土面と径50cmほどの炭化物が集中する範囲が並列して検出された。当初は屋外炉のようなものを想定したが、精査をしていく過程で鉄関連遺物が本遺構周辺から谷部にわたって多量に出土しはじめ、また焼土面を中心にしてS10グリッドでは、桁行3間、梁行2間の柱穴列が、

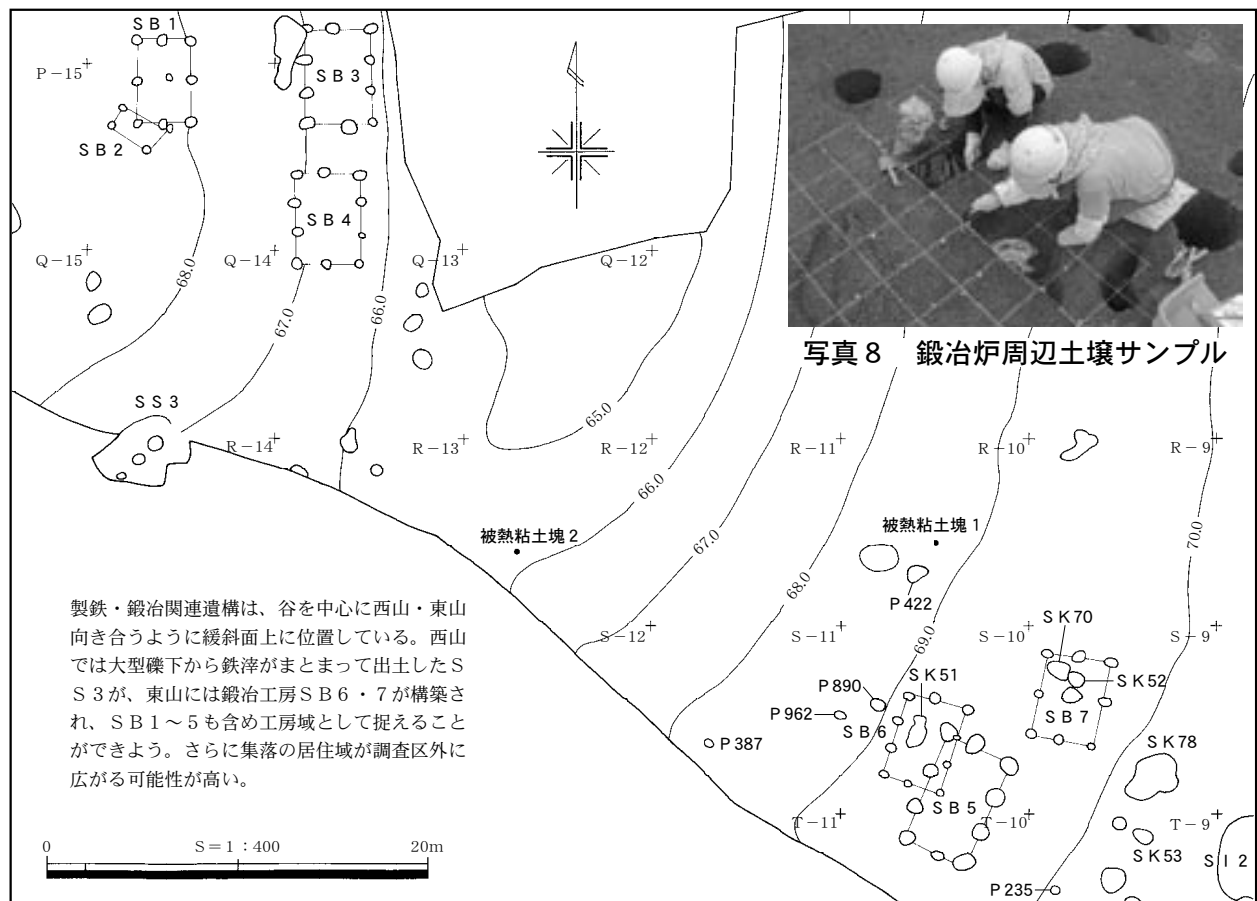


写真8 鍛冶炉周辺土壌サンプル

第149図 鍛冶関連遺構配置図



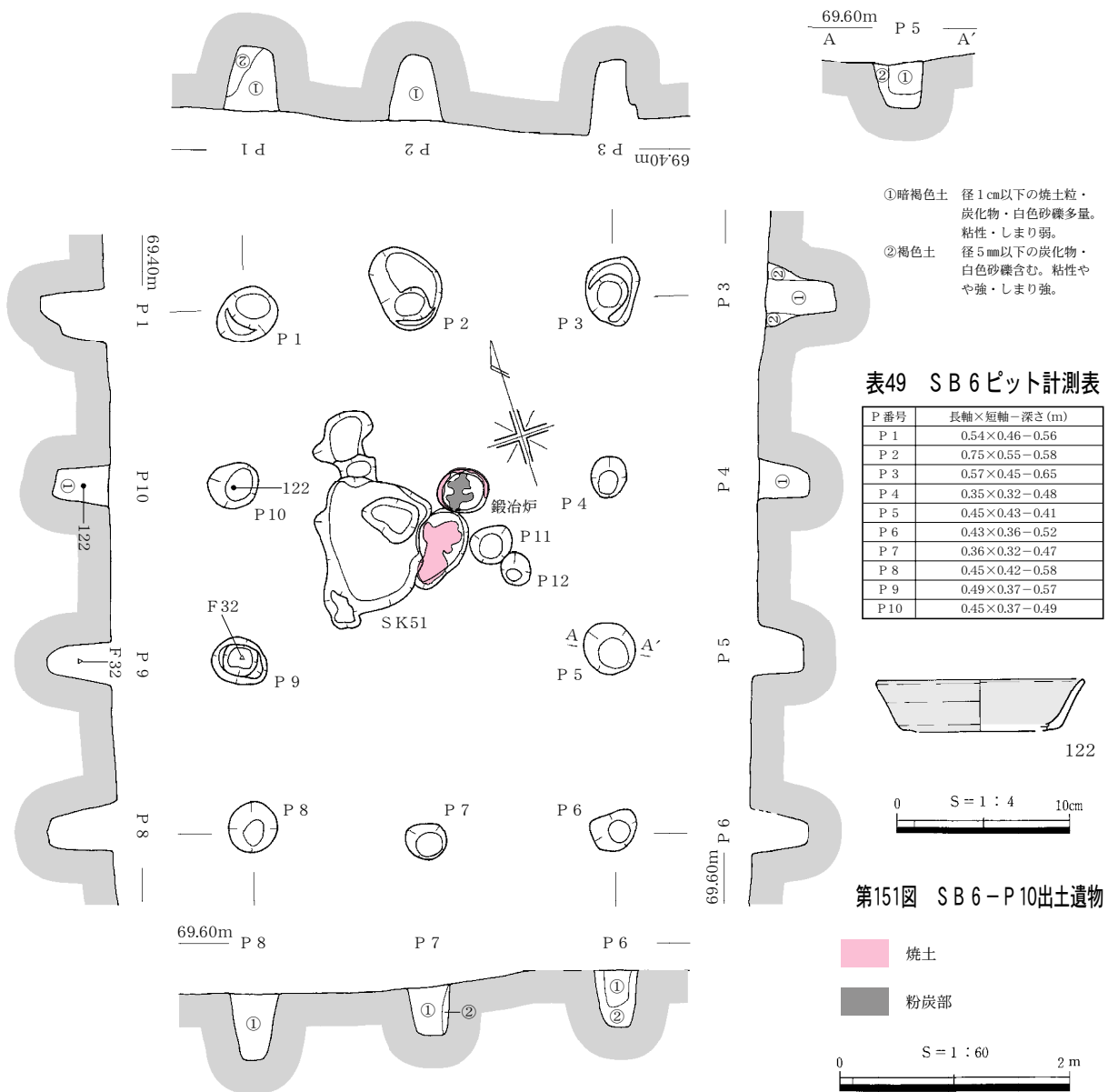
S 9グリッドでは桁行2間、梁行2間の柱穴列が検出されたことから鍛冶関連遺構と判断した。その後、たたら研究会委員の穴澤義功氏に現地指導を賜り、これらの焼土面が鍛冶炉で、周辺に土坑などの鍛冶関連施設の存在が想定されること、鍛冶関連遺構の調査法などについて御教示いただいた。

S B 6は南北1.75m、東西2.0m、S B 7は南北2.25m、東西2.25mの範囲を25cmの小区画に分割し、それぞれ南北ラインにアルファベット小文字、東西ラインにアラビア数字を付した。直交する区画を、たとえばa-1グリッドと呼ぶこととする。このように、25cmのメッシュを設定し、土壌サンプルの採取・水洗を行いながら調査を実施した。 (小口)

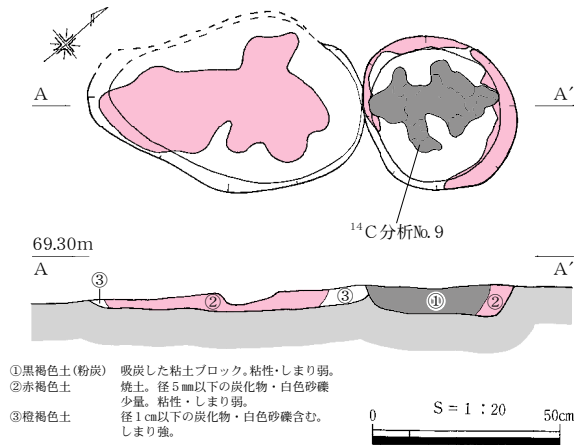
**S B 6 (第150~154・160・169図、表49・50、巻頭PL.2・3、PL.14)**

**位置** S 10グリッド、東山南端の台地緩斜面上、標高約69mに位置する。東側はS B 5と重複している。

**柱穴列** 平面形態は桁行3間(4.6m)、梁行2間(3.2m)の掘立柱建物跡である。主軸はN-18°



第150図 S B 6



- ①黒褐色土(粉炭) 吸炭した粘土ブロック。粘性・しまり弱。
- ②赤褐色土 焼土。径5mm以下の炭化物・白色砂礫少量。粘性・しまり弱。
- ③橙褐色土 径1cm以下の炭化物・白色砂礫含む。しまり強。

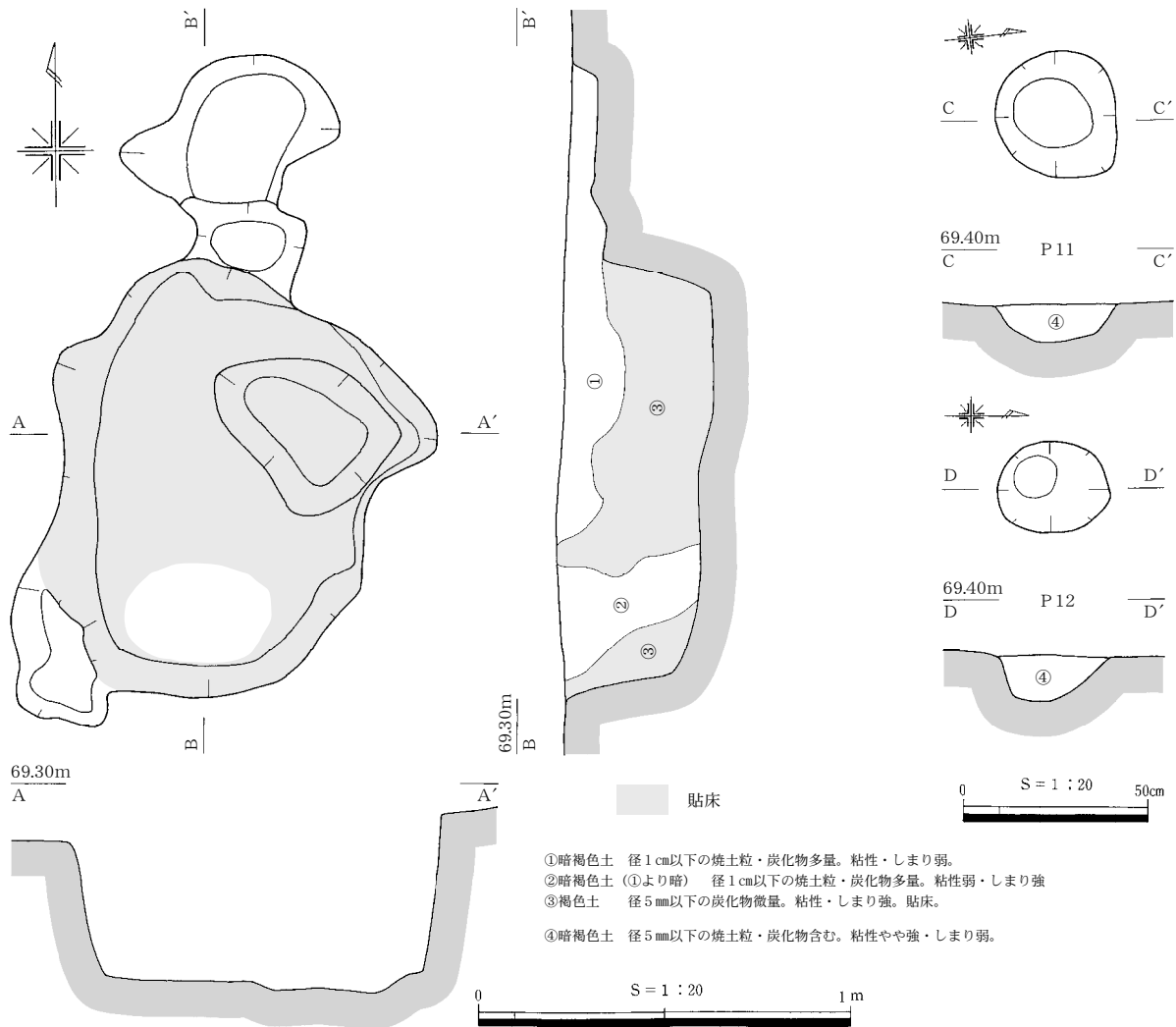
第152図 SB6-鍛冶炉

— E、桁梁に囲まれた面積は約14.7㎡を測る。柱間距離は、1.35m (P 1 - 2)、1.75m (P 2 - 3)、1.60m (P 3 - 4)、1.53m (P 4 - 5)、1.55m (P 5 - 6)、1.65m (P 6 - 7)、1.55m (P 7 - 8)、1.55m (P 8 - 9)、1.53m (P 9 - 10)、1.50m (P 10 - 1) と桁行・梁行ほぼ等距離である。柱掘り方は不整円形を呈し、柱底面の標高は68.6~68.8mを測る。P 1・3・9には柱当たりが確認でき、底面径は約22~30cmであることから柱径もほぼこれに近いものと推定される。

なお、P 4はSB 5 - P 1を切っていることが、ピットの土層断面から確認できたことからSB 5 廃絶後にSB 6が構築されていることが明らかとなった。柱穴

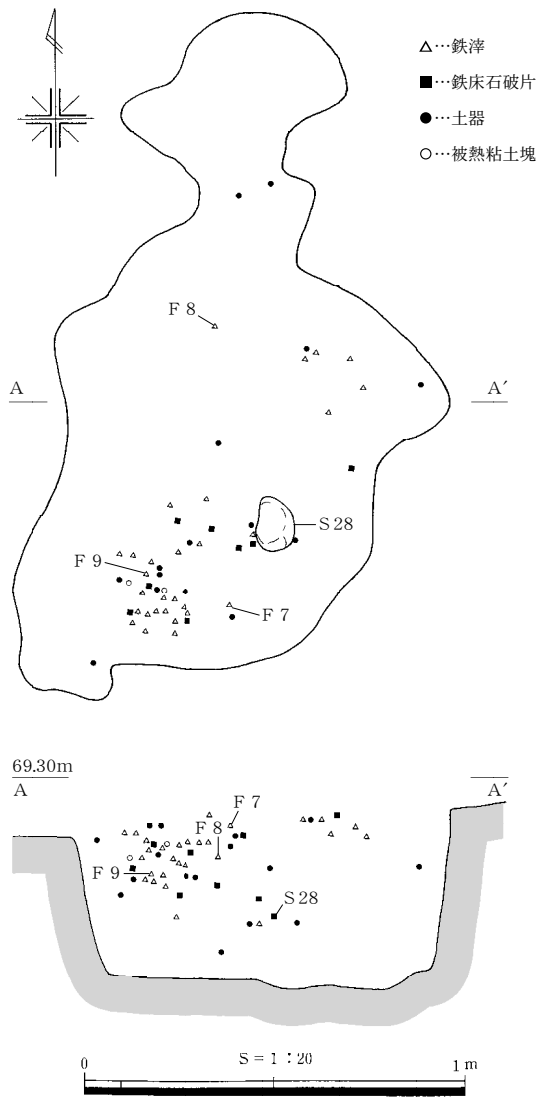
表50 SB6-P10出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
122	SB6-P10埋土	土師器 坏	- △3.0	1/10以下	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	緻密 1mm以下の砂粒	外面：橙色 内面：橙色	良好	内外面赤色塗彩



- ①暗褐色土 径1cm以下の焼土粒・炭化物多量。粘性・しまり弱。
- ②暗褐色土 (①より暗) 径1cm以下の焼土粒・炭化物多量。粘性弱・しまり強
- ③褐色土 径5mm以下の炭化物微量。粘性・しまり強。貼床。
- ④暗褐色土 径5mm以下の焼土粒・炭化物含む。粘性やや強・しまり弱。

第153図 SB6-SK51、P11・12



第154図 SB 6-SK 51遺物出土状況

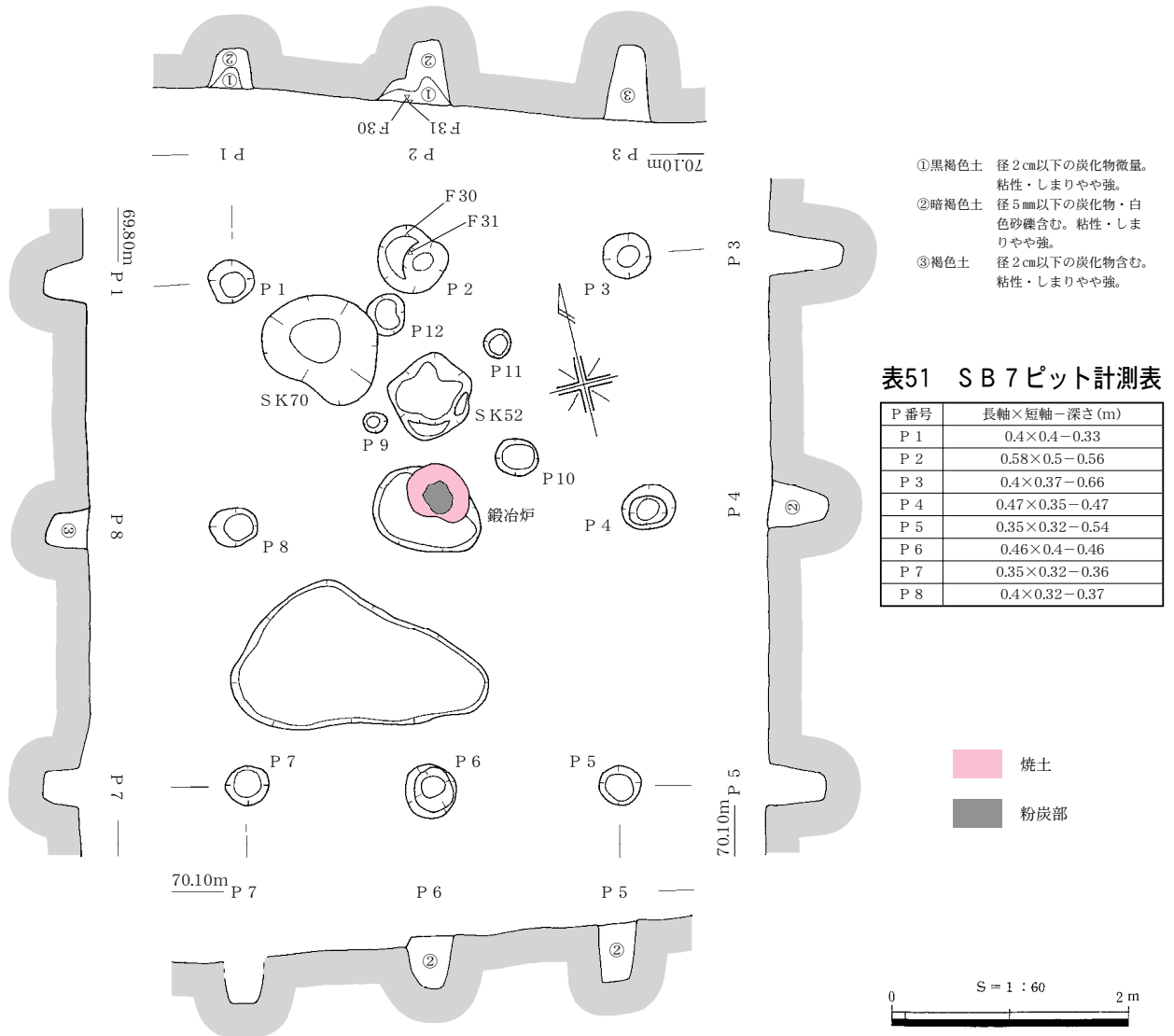
造であるが、東山は表土の形成が未発達であり、植林もなされていたという状況から、鍛冶炉の上部構造は廃絶後、比較的早い段階で失われていたものと考えられる。したがって、鞴の羽口の設置箇所などは不明である。

SK 51 (第153・154図、PL.14) 柱穴列内のやや北西寄り、鍛冶炉の西隣に位置する。長軸1.15m、短軸1.0m、深さ0.35～0.47m、ややいびつな楕円形を呈している。また、北には長軸0.45m、短軸0.4m、深さ0.07mの小ピットが並列する。SK 51掘り方の断面形態は桶形で、新鍛冶炉に隣接する底面は、わずかに挿り鉢状に窪んでいる。埋土は上部の径0.5～1.0cm大の焼土粒子や炭化物を多く含む①層暗褐色土と下部の粘性・しまりが強い③層褐色土から構成される。③層は貼床と考えられる。土坑南壁寄りでは径40cmほどの範囲にわたって、③層を抉入するように②層暗褐色土が堆積していた。②層は①層に比べ混入物は近似するが、しまりが強く色調も暗かった。①・②層中からは鉄滓や粒状滓・鍛造剥片、鉄床石破片といった鍛冶関連遺物が多く出土している。また、旧炉正面の②層直上からは安山岩製の石槌と想定される石器も出土した。

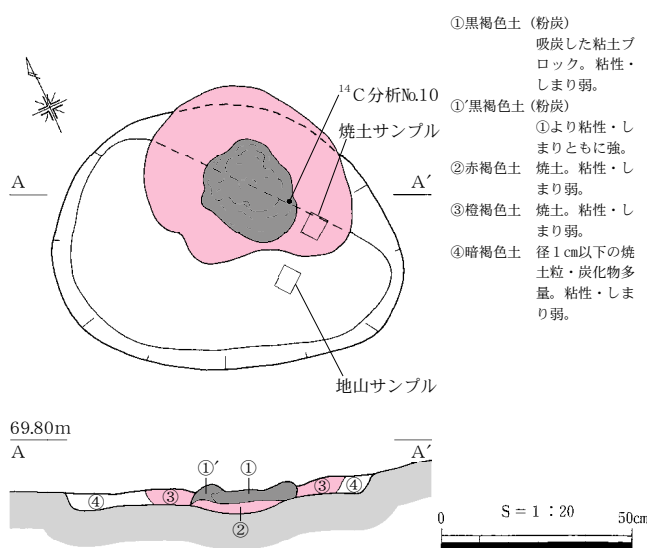
SK 51は、構築位置や出土遺物から、鍛冶工人の「足入れ穴」・「鉄床石の設置穴」と想定され、旧炉使用の際に②層堆積範囲が鉄床石を設置した場所と推定される。一方、新炉使用時は、土坑北東

の埋土の多くが炭化物と焼土粒・白色砂粒を含む①層暗褐色土から構成されるが、いずれも明瞭な柱痕を示すものは認められなかった。P 10から内外面に赤色塗彩がなされた土師器坏122が出土している。体部から口縁にかけて直線的に立ち上がり、底面は平坦である。内外面ナデ調整が施される。本例は、混入の可能性が想定される。

鍛冶炉 (第152図、PL.14) 柱穴列に囲まれたほぼ中央に焼土を伴うピットが並列する。北側に位置する粉炭層を形成するピットは、焼土のみ残存するピットを切っていることから、前者を新炉、後者を旧炉とする。旧炉の掘り方は、長軸73cm、短軸48cm、深さ4cmの楕円形を呈している。断面形態は、浅い挿り鉢状であり、中心部にしまりの弱い焼土が、周縁部により色調が暗く土質が緻密である焼土が認められた。いずれも径0.5cm以下の炭化物を含んでいたが、密ではない。底面の標高は69.15mで、粘土を貼った痕跡はみられず、新炉を構築する際破壊され、わずかに炉の下部構造が残ったものと推定される。一方、新炉は径41×41cm、深さ8cmのほぼ円形を呈している。断面形態は桶形であり、粉炭が吸着・凝固した粘土ブロックを含む黒色土が中心部に認められ、周縁部は被熱によって赤褐色に酸化していた。掘り方底面は、平坦であり標高69.13mを測る。比較的、単純な鍛冶炉の構



第155図 SB7

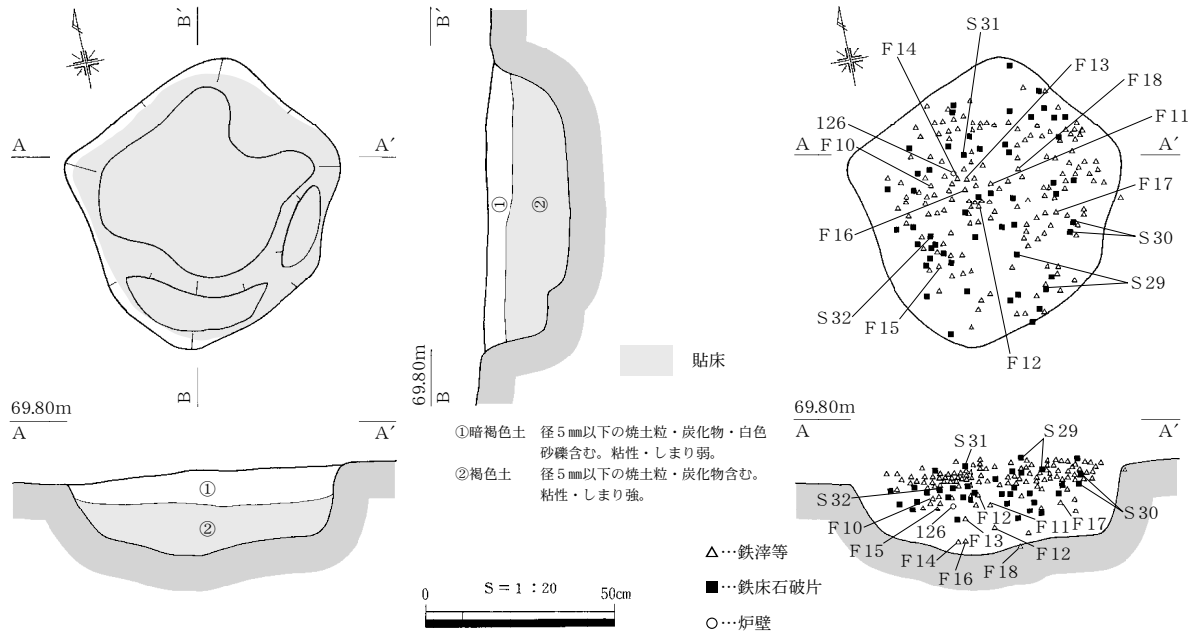


第156図 SB7-鍛冶炉

寄りが主な作業空間であったと推定される。後述する微細遺物がこの周辺で多く回収されていることから、このことは裏付けられよう。

P 11・12 (第153図) 旧炉東に隣接し、P 12がP 11を切っている。P 11は径34×32cm、深さ10cmの不整円形、P 12は径30×24cm、深さ12cmの楕円形を呈している。いずれも炭化物と焼土粒子を含んだ④層暗褐色土が堆積しているが、SK 51に比べ密ではない。両ピット内の埋土中にも、わずかであるが微細遺物が含まれていた (第160図)。

時期 SB 6の出土遺物は操業時期を特定できるものは少ないが、柱穴列P 10から土師器



第157図 S B 7 - S K 52

坏122が1点出土している。これは伯耆国序編年第2段階SD37様式に比定されること、柱穴列の埋土の特徴などから、本遺構は平安時代前期、9世紀代に操業・廃絶されたものと考えられる。(小口)

S B 7 (第155~160・170、表51、巻頭PL.1、PL.14・15)

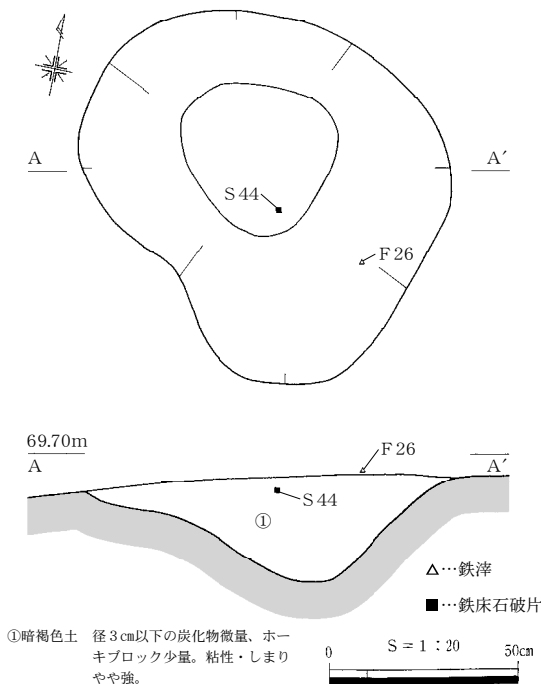
**位置** S 9グリッド、東山南端の台地上、標高約69.7mに位置する。南西にはS B 5が隣接している。

**柱穴列** 平面形態は桁行2間(4.5m)、梁行2間(3.2m)の掘立柱建物跡である。主軸はN-12°-E、桁梁に囲まれた面積は約14.4㎡を測る。柱間距離は、1.60m (P 1-2)、1.70m (P 2-3)、2.16m

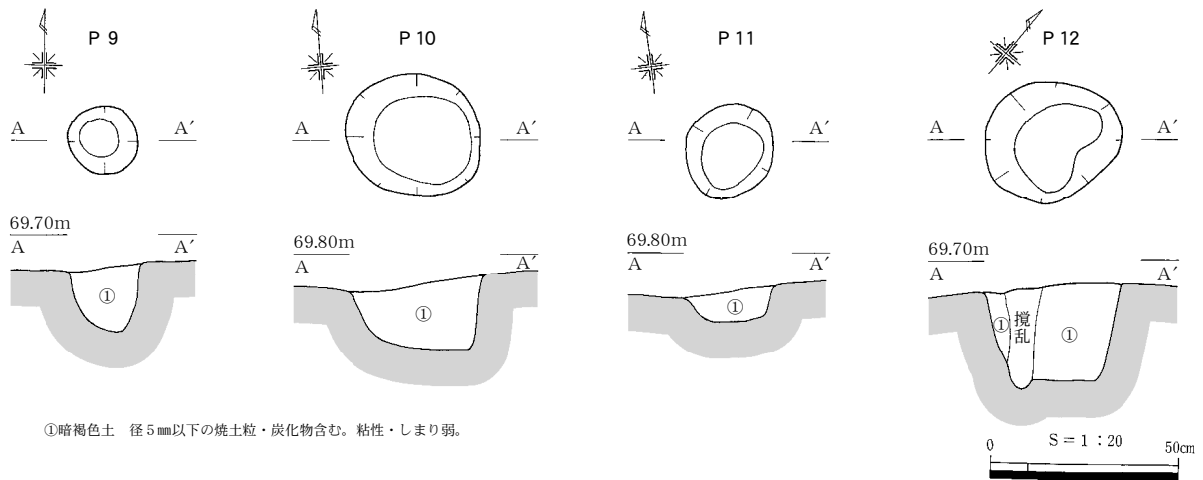
(P 3-4)、2.36m (P 4-5)、1.55m (P 5-6)、1.55m (P 6-7)、2.20m (P 7-8)、2.10m (P 8-1)で、P 4がやや東に張り出している。柱掘り方は不整形円形を呈し、柱底面の標高は69.1~69.3mを測る。P 4・6には柱当たりが確認でき、底面径は約22~30cmであることから柱径もほぼこれに近いものと推定される。

柱穴の埋土の多くが炭化物と焼土粒・白色砂粒を含む①・②層暗褐色土から構成されるが、いずれも明瞭な柱痕を示すものは認められなかった。P 2埋土上層から椀形鍛冶滓F 30・31が出土している。

**鍛冶炉 (第156図、PL.14)** 柱穴列に囲まれたほぼ中央に粉炭層と焼土を伴うピット(火窟)が位置している。掘り方は、長軸96cm、短軸74cm、深さ7cmの楕円形を呈している。断面形態は、浅い掘り鉢状であり、北東壁寄りに粉炭が吸着・凝固した粘土ブロックを含む①層黒色土が認められ、周縁部は幅10~15cmにわたって被熱



第158図 S K 70



第159図 S B 7-P 9～12

により赤褐色に酸化していた。①層は径28×22cm、厚さは周縁部が5cm、中心部が3cmと中央がやや窪んでいる。③層の焼土外周には、径1cm以下の焼土粒子・炭化物を多く含む暗褐色土が認められる。鍛冶炉掘り方底面は、①層下部がやや窪んでおり標高69.61mである。S B 6と同じく、本炉も上部構造は削平されてしまった可能性があり、羽口の設置箇所は確認できなかった。なお、この鍛冶炉については、焼土面の被熱温度分析を実施している（第5章第3節）。

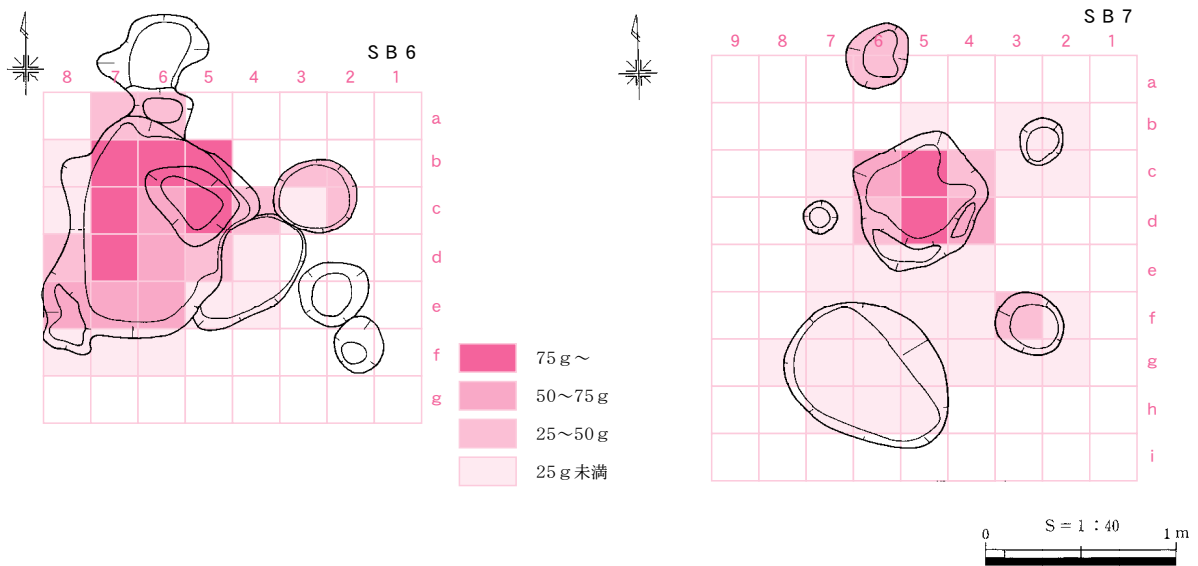
S K 52（第157図、PL.14） 柱穴列内の北寄り、鍛冶炉の北側約20cmに位置する。長軸76cm、短軸72cm、深さ22cm、ややいびつな五角形を呈している。掘り方の断面形態は桶形で、鍛冶炉方向の南側と東側はテラス状の段差が確認される。底面はほぼ平坦であり、標高69.43m。埋土は、上部の径0.5cm大の焼土粒子や炭化物を多く含む①層暗褐色土と下部の粘性・しまりが強い②層褐色土から構成され、②層は貼床と考えられる。①層中からは鉄滓や粒状滓・鍛造剥片、再結合滓、炉壁、鉄床石破片といった鍛冶関連遺物が多量に出土し、凶化していないが赤彩された土器器坏の小片も数点、土壌サンプルの水洗によって得られている。

S K 52は、構築位置や出土遺物から、鍛冶工人の「足入れ穴」、もしくは「鉄床石の設置穴」と想定される。

S K 70（第158図、PL.15） 柱穴列内の北西コーナーに位置する。平面形態は、西南側が括れた不整形円形であり、南北97cm、東西96cm、深さ28cmを測る。掘り方の断面形態は、挿り鉢状を呈し、底面の標高は69.36mである。埋土は炭化物やホーキブロックを含む①層暗褐色土が堆積し、上部から腕形鍛冶滓F 26と滓付着の鉄床石S 44が出土している。また、同じく埋土中から出土した別の鉄床石破片が、S K 52出土S 33と接合している。本遺構の埋土は残念ながら、サンプリングが実施できなかったが、多量の鍛冶関連遺物が出土したS K 52に近接し、遺物も接合していることなどから、他にも微細遺物が含まれていた可能性が高い。

P 9・10・11・12（第159図、PL.15） P 9は、S K 52の西側約12cmに位置する。平面形態は、径18×18cmの円形を呈し、深さは18cmを測る。底面の標高は69.44m、碗状に丸味を帯びている。P 10は、S K 52の南東約32cmに位置する。径35×32cmの不整形円形を呈し、深さは18cm、底面は平坦で桶状を呈している。底面の標高は69.55m。P 11は、S K 52の北東約17cmに位置し、径25×23cmの楕円形を呈している。底面は平坦で、標高69.63m、桶状を呈している。P 12は、S K 70北東に隣接している。径36×32cm、深さ25cmを測る。P 9～12の埋土は、いずれも焼土粒子・炭化物を





第160図 SB 6・7 鍛冶炉周辺、粒状滓・鍛造剥片分布図

含む暗褐色土であり、SK52埋土に近い。ただし、サンプリングした土壌を水洗した結果、微細遺物はいずれも少なかった。

**時期** SB7の出土遺物は操業時期を特定できるものは少ないが、SK52埋土を回収し水洗したところ、赤色塗彩を施した土師器坏破片が数点みられた。形態や胎土の特徴などから、伯耆国庁編年第2段階に比定されるものと思われる。したがって、本遺構は平安時代前期、9世紀代に操業・廃絶されたものと考えられる。(小口)

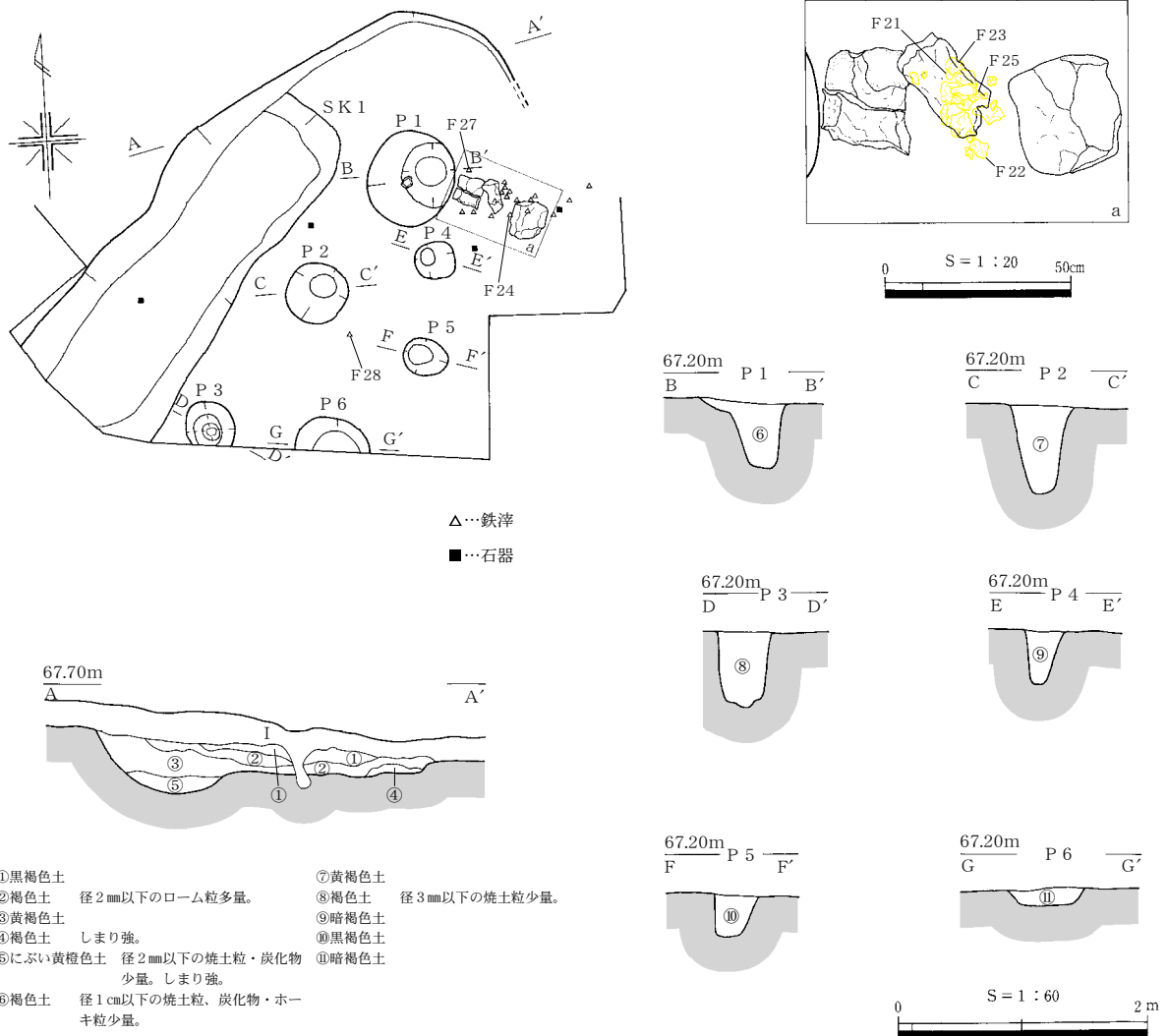
**SS3 (第161～163図、表52・53、巻頭PL.3、PL.17・35)**

Q14～R14グリッド、標高67.2m、谷部緩斜面に位置する。V層下位精査中に検出した。遺構の一部が調査区外に伸びるため詳細は不明であるが、検出した範囲での規模は長軸4.5m、短軸3mである。検出面からの深さは最大35cmを測る。埋土は褐色土が主体をなし、堆積状況は自然堆積の様相を示す。

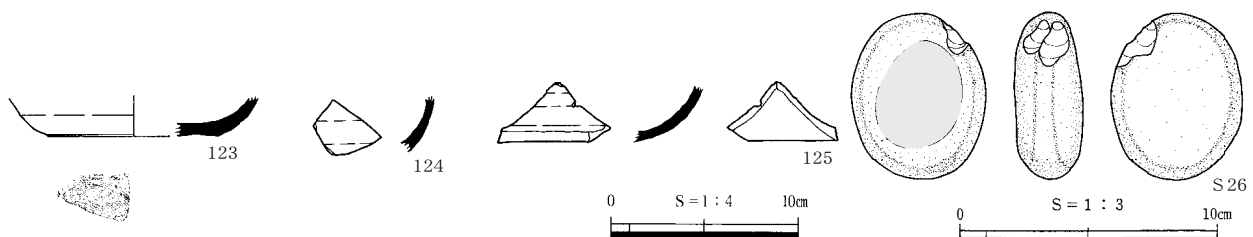
床面において土坑1基、ピット5基を検出した。土坑は長方形を呈し、深さは20cmを測る。埋土には焼土粒・炭化物が混入する。ピットは柱痕を確認できるものは皆無であったが、配列・深さよりP1～3が柱穴と考えられ、何らかの上屋構造を有していたと想定される。

遺物は埋土中より土師器坏・甕、須恵器坏・甕・壺の土器片、石器、床面直上より鉄滓(総重量約874.8g)が出土した。123は底面に回転糸切り痕がみられる。125は断面に赤色顔料が付着することから、坏を転用し使用した可能性がある。S26は磨石で表面のみ使用痕がみられる。土師器は小片のため図示していないが、いずれも伯耆国庁編年第2段階に比定される。鉄滓については第5節にて詳細を扱うため、ここでは出土状況のみ記載する。鉄滓はP1東側付近で東西および上方を礫で囲まれた状態で出土した。上方に覆い被さる礫は西側の礫と接合することから、2次的に崩落したものと思われるが、東西に位置する礫および鉄滓は出土状況から廃絶後の自然流入とは考え難い。また礫には使用痕や鉄分の付着がみられないことから、鉄滓を囲むために人為的に配置したものと考えられる。

時期は出土遺物より平安時代前期、9世紀代と考えられる。性格は意図的に鍛冶滓、椀形鍛冶滓を礫で囲み配置すること、近接には鍛冶炉を伴う掘立柱建物跡が存在することから鍛冶作業に関連する施設が想定される。また、先述したように本遺構は調査区外南側に伸びるため、当該期の鍛冶関連施



第161図 S S 3



第162図 S S 3 出土遺物 (1)

第163図 S S 3 出土遺物 (2)

表52 S S 3 出土土器観察表

遺物No.	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	残存率	調整・文様	胎土	色調	焼成	備考
123	SS3 3層	須恵器 坏	底径※8.8 Δ2.0	1/4以下	外面：回転ナデ、底部回転系リ 内面：回転ナデ	密 1mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：灰色	良好	
124	SS3 埋土	須恵器 坏	— Δ2.9	1/10以下	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 1mm以下の白色砂粒	外面：灰色 内面：灰色	不良	やや軟質
125	SS3 埋土	須恵器 坏	— Δ2.0	1/4以下	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密 1mm以下の黒色砂粒	外面：灰色 内面：灰色	良好	

表53 S S 3 出土石器観察表

遺物No.	出土位置	層位	器種	石材	法量				備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
S26	SS3	埋土	磨石	安山岩	6.5	2.6	5.4	120.0	表面磨面、表・側面剥離痕

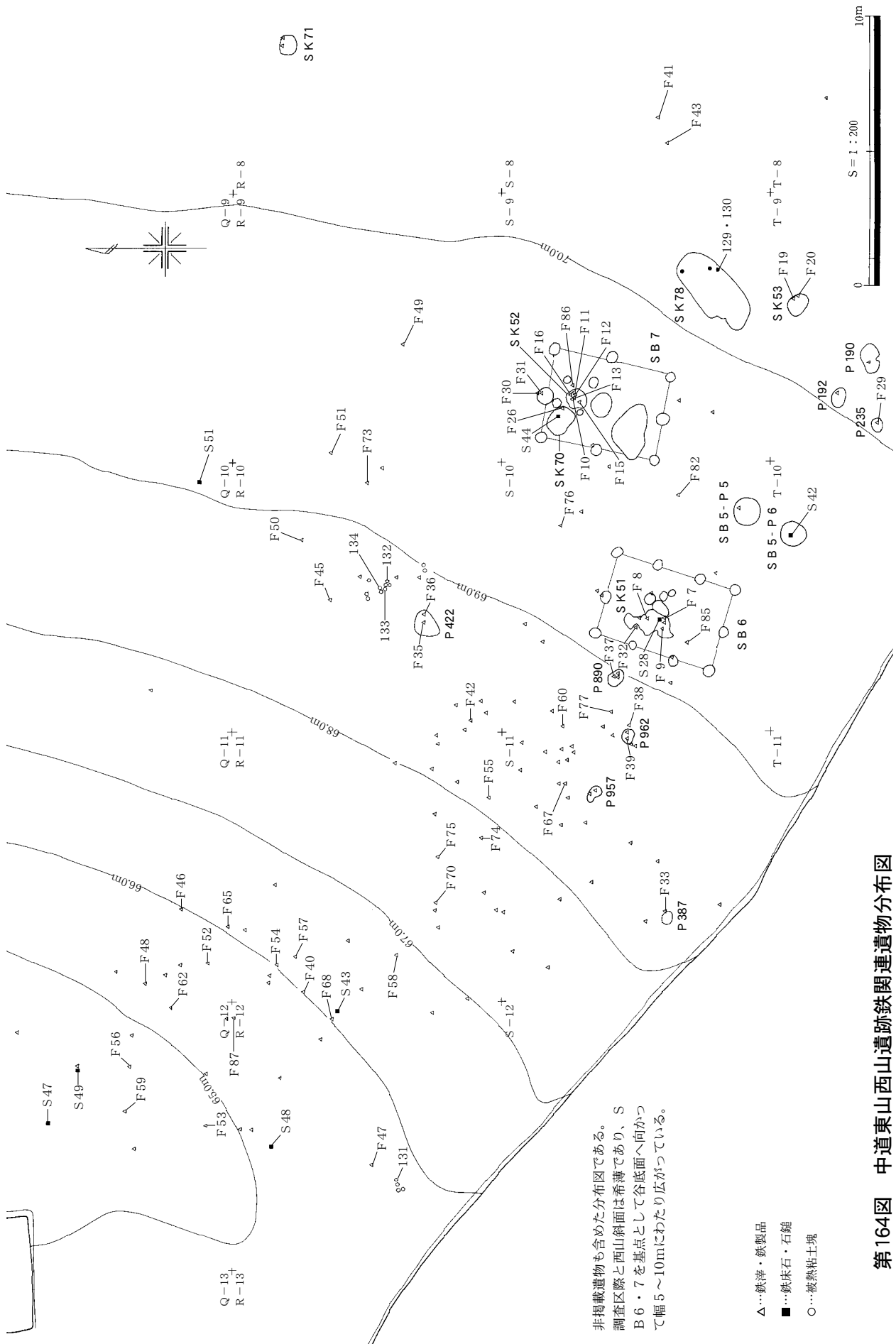


表54 S B 6 鍛冶炉周辺、粒状滓・鍛造剥片出土地点別重量一覧表

出土位置	粒状滓 (g)		鍛造剥片 (g)				粒状滓・鍛造剥片 合計 (g)	その他の 微細遺物 (g)	微細遺物合計 (g)
	～0.8mm	合計	～0.8mm	0.8～1.5mm	1.5mm～	合計			
a-6	2.0	2.0	26.4	8.2	2.5	37.1	39.1	3.0	42.1
a-7	1.2	1.2	19.0	5.1	2.8	26.9	28.1	3.6	31.7
b-5	2.6	2.6	57.2	30.0	5.2	92.4	95.0	7.9	102.9
b-6	1.4	1.4	100.0	30.8	7.1	137.9	139.3	9.0	148.3
b-7	1.5	1.5	52.5	15.2	7.6	75.3	76.8	4.7	81.5
b-8	1.0	1.0	5.6	2.6	1.5	9.7	10.7	4.6	15.3
c-3	0.0	0.0	1.9	1.3	0.0	3.2	3.2	0.0	3.2
c-4	1.3	1.3	29.4	8.2	3.5	41.1	42.4	3.5	45.9
c-5	1.5	1.5	75.5	22.4	4.4	102.3	103.8	7.3	111.1
c-6	1.4	1.4	41.4	14.6	5.6	61.6	63.0	5.2	68.2
c-7	1.3	1.3	65.0	18.6	8.7	92.3	93.6	12.9	106.5
c-8	1.5	1.5	13.6	5.5	3.6	22.7	24.2	5.1	29.3
d-4	0.0	0.0	7.8	2.7	0.8	11.3	11.3	0.0	11.3
d-5	0.0	0.0	33.8	8.3	2.8	44.9	44.9	4.3	49.2
d-6	1.3	1.3	56.0	13.8	2.5	72.3	73.6	12.2	85.8
d-7	1.3	1.3	70.0	18.2	8.2	96.4	97.7	12.7	110.4
d-8	1.4	1.4	17.0	6.4	3.7	27.1	28.5	0.1	28.6
e-4	0.0	0.0	2.0	1.7	0.0	3.7	3.7	0.0	3.7
e-5	1.3	1.3	7.7	2.5	0.8	11.0	12.3	0.0	12.3
e-6	1.2	1.2	49.4	13.4	3.1	65.9	68.1	6.2	74.3
e-7	2.3	2.3	38.4	17.2	10.2	65.8	68.1	4.6	72.7
e-8	1.4	1.4	23.0	15.4	13.4	51.8	53.2	3.8	57.0
f-6	0.6	0.6	3.3	1.5	0.9	5.7	6.3	0.1	6.4
f-7	0.7	0.7	3.1	1.7	1.8	6.6	7.3	0.0	7.3
f-8	0.8	0.8	12.6	4.3	1.0	17.9	18.7	1.8	20.5
S B 6 - 鍛冶炉	2.2	2.2	5.3	3.9	4.5	13.7	15.9	0.0	15.9
S B 6 - P 11	0.0	0.0	3.7	1.9	1.3	6.9	6.9	0.0	6.9
S B 6 - P 12	1.3	1.3	4.3	1.8	0.0	6.1	7.4	0.0	7.4
S B 6 - S K 51 - 一括	1.3	1.3	13.6	5.6	3.0	22.2	23.5	9.7	33.2
グリッド合計	33.8	33.8	838.5	282.8	110.5	1231.8	1266.6	122.3	1388.9

※ その他の微細遺物は、炭化物、鉄床石破片である。

表55 S B 7 鍛冶炉周辺、粒状滓・鍛造剥片出土地点別重量一覧表

出土位置	粒状滓 (g)		鍛造剥片 (g)				粒状滓・鍛造剥片 合計 (g)	その他の 微細遺物 (g)	微細遺物合計 (g)
	～0.8mm	合計	～0.8mm	0.8～1.5mm	1.5mm～	合計			
b-2	0.0	0.0	3.3	0.9	0.0	4.2	4.2	0.0	4.2
b-3	0.0	0.0	4.3	1.6	0.0	5.9	5.9	0.0	5.9
b-5	0.0	0.0	2.9	0.9	0.4	4.2	4.2	0.0	4.2
c-2	0.0	0.0	1.0	0.4	0.2	1.6	1.6	0.0	1.6
c-3	0.0	0.0	3.1	1.7	0.7	5.5	5.5	0.0	5.5
c-4	0.5	0.5	14.0	11.4	12.8	38.2	38.7	4.7	43.4
c-5	2.0	2.0	63.9	44.8	42.0	150.7	152.7	108.4	261.1
c-6	0.4	0.4	25.4	14.8	12.6	52.8	53.2	8.0	61.2
d-4	1.1	1.1	27.2	22.0	13.8	63.0	64.1	10.2	74.3
d-5	1.1	1.1	50.5	53.5	38.2	142.2	143.3	33.2	176.5
d-6	1.1	1.1	12.6	11.6	13.2	37.4	38.5	11.9	50.4
d-7	1.1	1.1	3.2	3.2	1.0	7.4	8.5	0.0	8.5
e-5	0.0	0.0	10.0	6.7	6.1	22.8	22.8	6.9	29.7
e-6	2.2	2.2	3.9	2.4	2.6	8.9	11.1	0.0	11.1
f-2	1.1	1.1	7.5	2.5	0.8	10.8	11.9	0.0	11.9
f-3	1.1	1.1	31.0	6.9	1.2	39.1	40.2	0.0	40.2
g-2	0.0	0.0	4.5	1.8	0.0	6.3	6.3	0.0	6.3
g-3	0.0	0.0	4.6	2.1	0.0	6.7	6.7	0.0	6.7
g-6	0.0	0.0	5.1	3.3	1.4	9.8	9.8	0.0	9.8
S B 7 - 鍛冶炉	3.3	3.3	5.2	4.5	3.2	12.9	16.2	1.6	17.8
S B 7 - P 4	1.1	1.1	31.4	6.2	1.5	39.1	40.2	0.0	40.2
S B 7 - S K 52 周辺	1.1	1.1	21.8	7.5	4.3	33.6	34.7	0.0	34.7
S B 7 - S K 52 - 一括	4.8	4.8	168.2	183.1	135.0	486.3	491.1	21.3	512.4
S B 7 - 一括	0.0	0.0	7.6	3.1	1.8	12.5	12.5	0.0	12.5
S B 7 メッシュ一括	1.1	1.1	4.4	3.4	3.4	11.2	12.3	0.9	13.2
グリッド合計	23.1	23.1	516.6	400.3	296.2	1213.1	1236.2	207.1	1443.3

※ その他の微細遺物は、炭化物、鉄床石破片である。

設あるいは集落跡などが調査区外に広がる可能性が高い。

(福井)

## 粒状滓・鍛造剥片の分布 (第160図、表54・55)

S B 6・S B 7 では鍛冶作業と操業空間の復元を行うために、鍛冶炉を中心に25cmメッシュを組